

緑丘窯跡

— 緑丘団地建設に伴う遺跡確認調査 —

1984.3

緑丘団地遺跡調査団

序 文

豊中市の北部、桜井谷窯跡群は市中央部に遺存する古墳時代中期の桜塚古墳群と共に学界周知の遺跡であります。

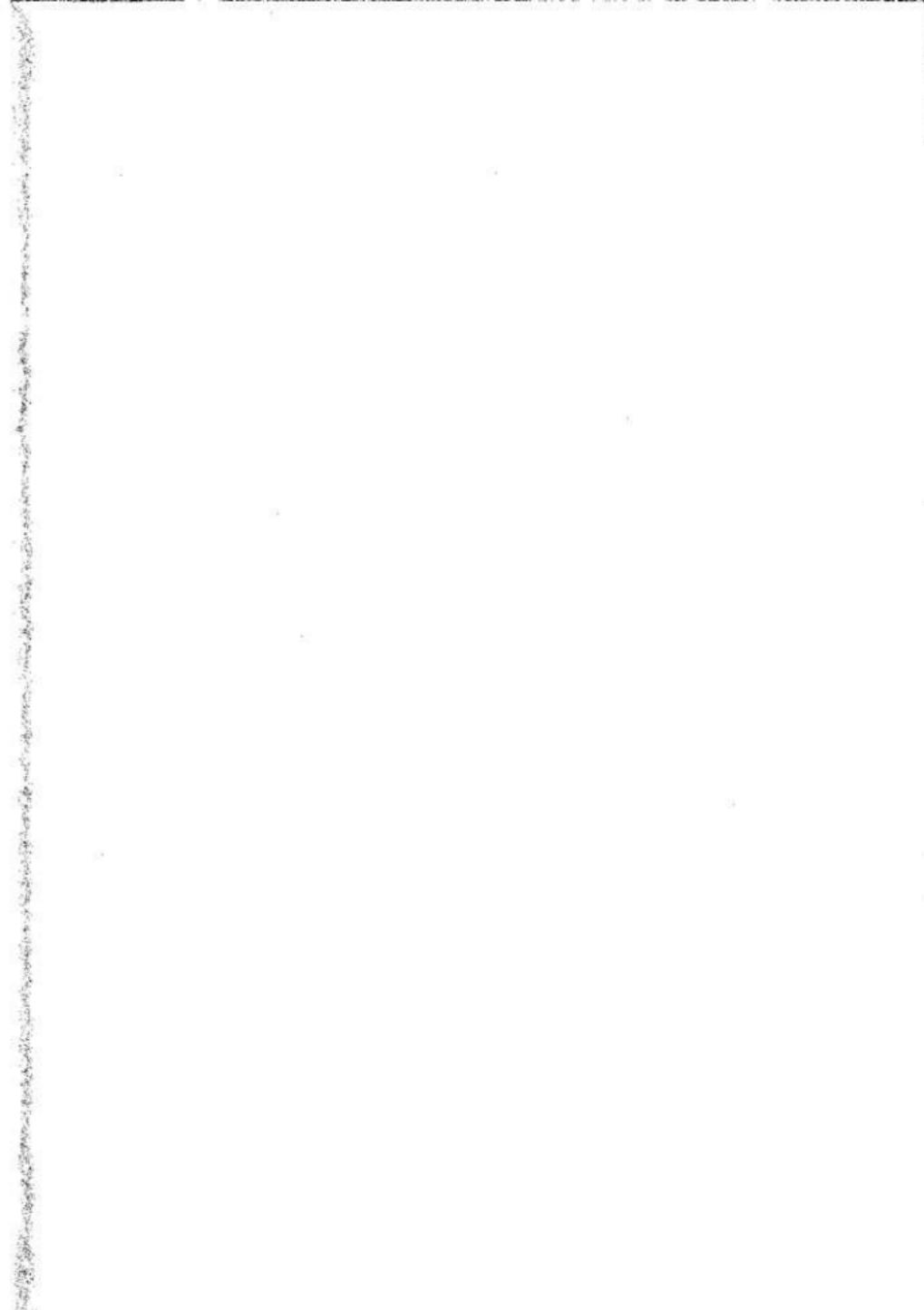
今度、桜井谷窯跡群北寄りの緑丘5丁目地帯の住宅・都市整備公団開発による造成工事に伴い、この地域が千里川をはさんで新池北畔窯跡や永楽荘窯跡、さらには野畠柵文遺跡など学術上貴重な埋蔵文化財の宝庫であることにかんがみ、住宅・都市整備公団のご支援のもとに事前に記録、保存をするために発掘調査を実施いたしました。

この報告書はこれらの調査結果についてのものですが、とくに窯跡群に関しての歴史・文化的に貴重な資料も発見され、非常に意義深いものがあると信じております。

なお本書の刊行にあたっては、塞中での発掘調査から出土遺物の整理、本書の刊行執筆まで終始積極的にご協力をいただきました調査団長の亥野彌先生をはじめ、発掘調査団並びに住宅・都市整備公団関係者、加えて夫々の分野でご支援をいただきました各位に衷心より感謝の意を表します。

昭和59年3月

豊中市教育委員会
教育長 湯元英世



緑丘窯跡の発掘調査によせて

豊中市緑丘地域は、市内桜井谷窯跡群、ならびに東に隣接する吹田市千里丘陵地帯の古窯跡群と共に学界周知の窯跡地域である。

特に緑丘は西南の千里川流域には桜井谷窯跡群と呼ばれる30基以上の窯跡が遺存していた地区と続いた位置にある。

今回調査されたものは今まで豊中市で調査されたものの中では最も新しい古墳時代後期（7世紀半ば以降）のもので市内に存在していた窯跡全体をみていくうえで、またそれら窯跡から出土した土器（須恵器）の型式編年を考察していくうえからも貴重な資料になりうるものといえる。

本調査で検出されたのは窯跡といっても煙道近くの窯床の一部だけで窯体の全容を知り得るものではなかったが、この窯で焼成された須恵器の期間、製作された主な須恵器の器形、またその編年などを研究するに充分な灰原の残存は研究者にとってせめてものすくいであったといえる。さらにここで製作された土器が、当時、近接地域に点在していたであろう集落への流通範囲をみていくうえからも意義深いものと考えている。

なお個々の遺物についての詳細な観察は時間の要することになるので本冊子では概観を述べておくにとどめた。

調査に際しては、住宅・都市整備公団、豊中市教育委員会の御援助を賜ったことと、多くの学生諸君の協力のあった事を記して謝意とさせていただきたい。

昭和59年3月

緑丘団地遺跡調査団

団長　亥野　彌

例　　言

1. 本報告書は住宅・都市整備公団の緑丘団地建設に伴う埋蔵文化財確認調査の報告書である。
2. 本地区の確認調査は、住宅・都市整備公団、豊中市教育委員会より緑丘団地遺跡調査団が委託を受け実施したものである。

緑丘団地遺跡調査団

団長	亥野 強	奈良県立橿原考古学研究所研究員 八代学院大学講師
調査委員	山村 黙	豊中市社会教育部長
調査員	柳本 照男	豊中市教育委員会担当職員
	柳本 正幸	豊中市文化財保護指導員
	厚美 正子	豊中市文化財保護指導員
調査補助員	小嶋 久夫 他2名	

3. 本報告書作成については主に亥野が執筆し、小嶋と岡崎茂和・祭本敦士が分担執筆している。
4. 調査の進行、出土遺物の考察等については豊中市文化財保護委員の藤沢一夫・富田好久の両氏と奈良県立橿原考古学研究所の泉森駿氏に助言をいただいた。
5. 現地での実測図は小嶋・岡崎・阪本正幸・新田哲也・丸山禎二・横田茂・大森修が行ない、遺物の実測図は祭本・吉村和昭・田中智美が担当し、遺物写真と拓影は亥野が行なった。
6. 調査実施にあたっての事務処理は豊中市教育委員会社会教育課、前 課長豆脇英世・同係長桑原善孝ならびに現 課長榎原正宣・同係長松尾善の各氏にお世話をいただいた。
7. 調査後の遺物整理に場所を提供していただいた豊島北小学校ならびに調査に協力を得た学生諸君に感謝したい。

参加学生 竹谷俊彦・園田克也・前田佳久・前沢郁浩・山田恵美

本 文 目 次

1. 調査の経過	1
2. 調査の方法	1
3. 調査日誌抄	2
4. 窯跡の位置と歴史的環境	3
5. 試掘溝の調査	5
6. 窯の構造(奥壁下床残部)	8
7. 出土遺物の観察	11
8. まとめ	35

挿 図 目 次

(本文参照頁)

第1図 灰原発掘作業	2
第2図 窯跡の位置と調査各トレンチ	4
第3図 第2トレンチA区南側断面図	5
第4図 第4トレンチ4層平面図	6
第5図 第5トレンチ 断面図	6
第6図 第17トレンチ断面図	7
第7図 奥壁下床残部 平面図	8
第8図 奥壁下床残部 断面図	9
第9図 奥壁下床残部 断面図	10
第10図 奥壁下床残部 断面立面図	10
第11図 灰原内トレンチ断面図計測壁面指示図	折込み
第12図 灰原トレンチ断面図A	"
第13図 灰原トレンチ断面図B	"

第14図 灰原トレンチ断面図C	折込み
第15図 灰原トレンチ断面図D	〃
第16図 灰原トレンチ断面図E	〃
第17図 窯跡旧地形実測図	〃
第18図 窯体内土器実測図	16
第19図 灰原内上器実測図	28
第20図 灰原内土器実測図	29
第21図 灰原内土器実測図	30
第22図 灰原内土器実測図	31
第23図 灰原内土器実測図	32
第24図 土器口縁部文様拓影	33
第25図 タタキ文と主要ヘラ記号拓影	34
第26図 器種不明土器	36

表 目 次

(本文参照頁)

第1表 ヘラ記号文一覧表	14
第2表 窯体内須恵器一覧表	15
第3表 灰原内須恵器一覧表	17

図 版 目 次

- 図版 1 発掘調査区域全景と試掘トレンチ
- 図版 2 灰原内遺物の出土状況
- 図版 3 奥壁下床残部
- 図版 4 窯体一部と灰原断面
- 図版 5 灰原内出土遺物
- 図版 6 灰原内出土遺物
- 図版 7 灰原内出土遺物
- 図版 8 灰原内出土遺物
- 図版 9 灰原内出土遺物
- 図版10 灰原内出土遺物
- 図版11 灰原内出土遺物
- 図版12 灰原内出土遺物
- 図版13 灰原内出土遺物
- 図版14 灰原内出土遺物
- 図版15 灰原内出土遺物

1. 調査の経過

緑丘丘陵付近は北に吹出市千里丘陵地をひかえ、すぐ南の千里川右岸には須恵器の古窯跡として知られる永楽荘窯跡、左岸には新池北畔西窯跡と野畠地区の縄文時代の遺跡がある。

本地域はそれらの遺跡との関連も考えられる地理的位置にあったため、住宅・都市整備公団の住宅建設に先だって発掘調査を企画、試掘調査から始めることにした。試掘の結果、完全なものではなかったが須恵器製作のための窯跡の一部を検出したので速やかに本調査に入ることになった。

2. 調査の方法

土地造成の行なわれると指定された全地域に幅2m。長さはそれぞれの地形に応じて20m又は10mの試掘溝（トレント）を19箇所設定、溝は地域の北方より順次南へ向うかたちで発掘することにした。

発掘は表土上の草刈りからはじめ上表面を削り次々に進めていくといった方法で行なったのであるが地形による高低差もあって地山までの数値は一定せず30cm程で終るトレントもあれば1m近く掘らねばならぬものもあった。

19箇所のトレントのうち17箇所では遺物らしいものも遺構も認められなかった。ところが第6トレント内で焼土や窯壁片とみられる土の塊の検出をみたのでその周辺を重点的に調査した結果、トレントの北東側かみ手で崩壊した窯体端、即ち恐らくその地形と部分からみて窯道下床面と見られる箇所を残す窯を確認することができた。この箇所から約5m離れた下方では左右に約10mの幅をもって広がる灰原の存在を確認した。そこから本調査に切り換え残っている窯体奥壁下床と、灰原の範囲調査、その実測図の作成、灰原内に包含されている遺物採集、出土状況の実測と写真撮影にかかったのである。

（小鳥）

3. 調査日誌抄

昭和57年12月23日

調査開始の打合せのため公團側の方2名、社会教育係長等と共に現地に赴く。

12月24日 9時調査参加の学生集合、試掘調査に入る。

12月25日 第1トレーナーを延長さす、B区とする。B区より土師器の小片、須恵器の小片さらにサヌカイト2片も採集する。

12月27日 第4トレーナーで小溝と直径80cm余りの土壌を検出、土師器の小片も採集できた。

昭和58年1月6日

第5トレーナー発掘終了、急な傾斜面より変形した鉄のかたまり、6箇が出土、これは戦時中のものではないかと思われる。

1月8日 第6トレーナーの発掘終了、こゝで焼けた土を検出。第7トレーナーを設定する。

1月10日 第7トレーナーまでの写真撮影を終える。

1月22日 第16トレーナー設定、須恵器小片と磁器小片の出土をみた。

1月26日 第19トレーナーまでの写真撮影終る。窯壁片の出土した第6トレーナーを拡張、トレーナー上手北東部で窯跡一部を検出することができた。

1月27日 窯体付近の雜木伐採と表土剥ぎを行う。

1月28日 窯体残部床の平面実測図作

成を行う。灰原内に杭打ち
をし、トレーナーを設定する。

1月29日 窯体全域の写真撮影を行う。

1月31日 煙道残床内に小溝を設け、
床面の断ち割り作業を行う。

2月1日 床面断ち割り後の断面図の
作成と写真撮影を行う。

2月3日～10日 灰原内に乱立する雑

木伐採を行うと共に表土剥ぎを行い灰原の範囲確認を急ぐ。

2月11日 表土剥ぎを終了しほば灰原の輪郭をつかむ。

2月12日～18日 灰原内トレーナーより遺物の採集を行う。また灰原の断面図を作成、さらに写真撮影も行う。

2月19日 灰原の削除作業終了。

2月20日 旧地形の測量開始。

2月23日～24日 窯床残部の全体写真を撮影。地形測量も完了する。

2月25日 現地を引き上げる。



第1図 灰原発掘作業

(小鳥)

4. 窯跡の位置と歴史的環境

位 置

窯跡の一部が遺存していたのは農中市緑丘5丁目で府立農島高等学校校庭南側の小高い丘陵の傾斜面であった。この丘陵から南には標高112mの島熊山をみることができる。北には133,8mを記す三角点のある市境山をせねていている。西側の低部では浅い渓谷となっていて、その間を蛇行しながら流れる千里川流域では川をはさんで大小20余にのぼる溜池が、それぞれ平地に向って延びている丘陵裾部に点在し、こうした池の近くに存在する窯跡群は学界でも著名なものである。

千里川両岸はやゝ開けており畠地や田地となって季節にあった折々の蔬菜が栽培され、収穫をまつ野畠、少路、内田、柴原といった集落がある。しかしのどかであった住宅地の周辺も現在では開発による土地の変貌もはげしく、自然環境は著しく変化し、丘陵を切断して次々と高層の畠地、ビルディング、学校建設等が進められている。それでもなをこの近くには緑の深い森かげも幾つかが残っており、時折りは小鳥のさえずりの聞けるのはせめてもの慰めと云うべきであろう。

歴史的環境

緑丘近くの考古学的遺跡としてはすぐ南に縄文時代の野畠遺跡が千里川の左岸、標高約50mの河岸段丘上に存在している。こゝからはかって縄文時代後期の中津式土器の出土をみたことがある。さらに南にいけば、安山岩の剝片とともに石鎚、刀子状の鉄器も採集された上野遺跡がある。

弥生時代になると川の右岸、標高約45mに中期の上器の出土をみた春日町遺跡が遺存している。ここでは櫛描文のある土器片と半分欠損した磨製石鎌の採集が記録されている。

この他、南部の平野に入ると二口の銅鏡を出土した原田神社境内遺跡、腰骨に長さ17cmもの石槍の突きさしきった人骨の山上で知られた勝部遺跡、穂積式土器の名称の冠せられた阪急電車宝塚線、駿府御西側にある穂積遺跡など市内南の平野部で多くの遺跡が残っている。

古墳時代に入って前期のものは南刀根山の丘陵が舌状に南へ突出した部分に造営された御山古墳が先づ目につく。ここから出土した銅鏡、三角縁三神三獣鏡は茨木市宿久庄の紫金山古墳出土のものと同じ鋳型で作られた肩范鏡の分布範囲をみていくうえでの好資料となっている。

刀根山の丘陵地が北西へ続く待兼山の北縁には待兼山古墳があった。ここからは碧玉岩製の腕輪、即ち車輪石、鏡形石、石鏡、それに伊勢守草文帶四神四獸鏡が出土している。

中期古墳は丘陵から台地、または平野に造営されることになるが、その数は40基にも及んでいる。そのうち、前方後円墳で周濠をもつもの1基、円墳をもつもの4基となっている。

このような古墳が一地域内に集中している場合もあるので古墳群としてまとめられている。

その代表的なものに桜塚古墳群がある。この古墳群中には大石塚、小石塚をはじめ、昭和58年夏に発掘調査され、短甲三領、玉類、珍らしい石製柄の短剣など貴重な副葬品の出土をみた大塚古墳も含まれている。

後期古墳になると新免宮山古墳群が出現する。このうち宮山古墳からは小形陶棺が発掘され、宮山南古墳からは銀張銅製耳環、銅製鉛付腕輪等が出土している。それに市内北辺部に遺存する野畠春日町古墳群、太鼓塚古墳群等が主な後期の古墳とされている。

以上の古墳群での埋葬器として使用されている陶柏、副葬品としての須恵器などを焼成製作した古窯跡としては当然桜井谷窯跡群の存在を見逃すわけにはいかないだろう。

古窯跡としては桜井谷以外に青池周辺のものや、熊野田窯跡も確認されている。緑丘の窯跡はこうした窯跡群よりは少し離れた北方に立地しているので前述のものとどのような関連性をもっているのか、また地区全体の歴史的推移のなかでどのように位置づけをすればよいのか、今後の入念な考察を待たねばなるまい。それだけに本窯跡出土の土器は重要な意義をもっている。

(亥野)

参考文献：豊中市史第1巻
豊中市史 資料編1
桜井谷窯跡群2-17窯跡 報告書第9集

第2図 窯跡の位置と調査各トレンチ（・印 窯跡）



5. 試掘溝の調査

試掘調査段階では丘陵の南側斜面に合計19箇所のトレンチを設定した。発掘調査は丘陵の頂上部から裾野まで広範囲にわたった。それによって旧地形、遺物の分布、遺構などその大要を知ることができた。

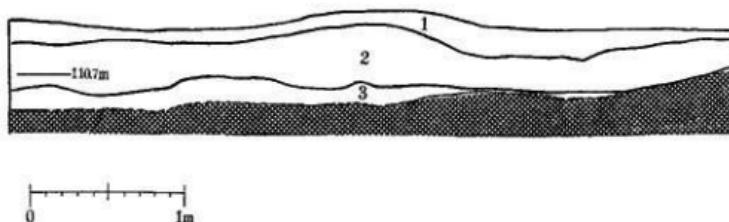
この項では代表的なトレンチを挙げ主要点を記述することにする。

第1トレンチ

調査区域の北東、頂上部に位置する幅2m、長さ20mのトレンチで、表土層の下は淡黄灰色の粘土質であった。この層より須恵器片が数点出土した。また同層の浅い落ち込みより須恵器、土師器の小片数点が検出された。

土器片に混ってサヌカイトチップ2片の出土も加えておく。この辺りを拡張し、調べたが変化はなく、浅い落ち込みについてもその性格をしるものはなにもなかった。

第3図 第2トレンチA区南側断面図 1. 表土 2. 淡黄灰色土 3. 明黄灰色粘質土



第2トレンチ

北部頂上に位置する幅2m、長さ15mのトレンチである。

第一層表土、第二層淡黄灰色土、第三層明灰黃色粘質土と分層できた。遺物、遺構は検出されなかった。

第3トレンチ

第2トレンチの南側に位置する幅2m、長さ20mのトレンチである。表土を剝離すると、淡黄灰色土の第2層がある。第3層は淡青灰色粘質土となっている。トレンチ内西側、第3層より幅150cm、深さ50cmの溝状の落ち込みが検出されたが遺物は含まれていなかった。第3層は地山面であり、旧地形は南へ急下降していた。溝状の落ち込みは自然のものであった。

第4トレンチ

北東部第1トレンチの下方に位置する幅2m、長さ20mのトレンチである。表土層下の第2

褐色淡灰灰色土巾からは土師器片が数点出土した。第3層は淡茶色土層で、第4層淡茶褐色粘質土層へと続く、第4層より溝状の落ち込みと土壤が検出された。溝状の落ち込みは幅50cm、深さ20cmであり、北東から南西部へと続いている。土壤は長径約75cmの梢円形状で、深さ20cmであった。土壤内に2層に分かれ、上層の茶褐色弱粘質土は深さ10cmで須恵器1点を含んでいた。下層は炭化層である。この層位から遺物は検出されなかったが急にこの辺りを幅2mずつ拡張してみたが、溝状落ち込みの続きは見られたもののpitはなかった。

第5トレンチ

丘陵中腹部、第3トレンチの下方に位置する幅2m、長さ20mのトレンチである。表土層は第2層で暗青灰色粘質土、第3層淡黄色粘質土、第4層暗黄褐色砂質土に分層できる。

このトレンチでは中央部南側、第3層で戦争中のものではないかと思われる丸い鉄弾10個を採集した。参考品として記録しておく。

その他遺物、遺構は見当らなかった。

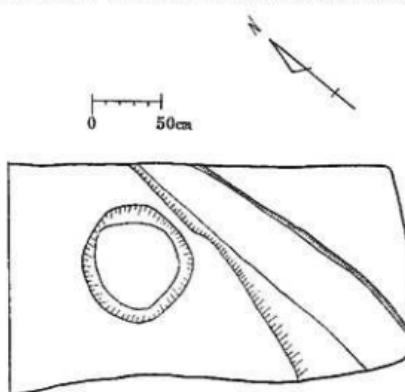
第5図 第5トレンチ断面図



第6トレンチ

丘陵内では北西にあたり、窯跡残存部の南西にあたる。幅は2m、長さ20mのものである。表土を剥離すると第2層淡黄灰色土、第3層黄褐色粘質土、第4層黄白色粘質土である。遺物は第3層、第4層より須恵器数10点窯壁片数点が出土した。遺構としては第4層より炭化物を含む窓み4ヶ所が検出されたので幅4mに拡張して調査した。窓みは旧地形によるものであり、その中に須恵器や炭化物が混入したものである。これらの須恵器片、窓壁片は灰原からの

第4図 第4トレンチ4層平面図 小窓と炭化層を含む窓み



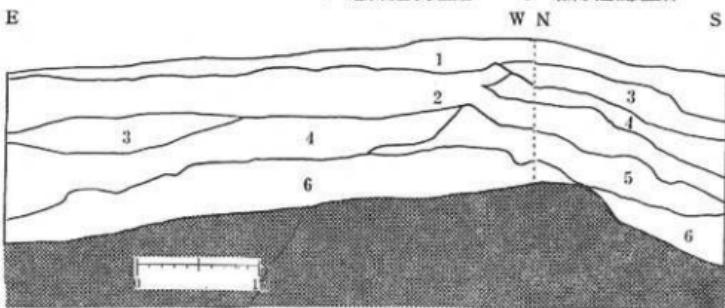
流れ込みによるものであることが調査を進めていくうえで明らかとなった。

第14トレンチ

丘陵の裾部、東側に位置するものでこれも幅2m、長さ20mのものである。表土下第2層に淡黄色粘質土、第3層青灰色粘質土である。トレンチ内東側の地山面より溝状の落ち込みが検出され、その中に炭化物の残存はあったが遺物はみられなかった。

第6図 第17トレンチ断面図

1 表 土	4 暗茶色砂質土層
2 淡黄色砂質土層	5 暗茶色砂質土層
3 暗茶褐色砂質土層	6 暗茶灰色粘質土層



第17トレンチ

これも14トレンチ同様裾部に位置する幅2m、長さ10mのものである。遺物、遺構の検出はなかった。地層状況を記しておく。表土下第2層淡黄色砂質土、第3層暗茶褐色砂質土、第4層暗茶灰色粘質土と分層されていた。

第19トレンチ

丘陵中腹部、窓跡灰原の東南側に位置する幅2m、長さ20mのトレンチである。表土下の第2層は淡黄色粘質土、第3層黄褐色粘質土に分層される。トレンチ南西側は灰原の東端と隣接しており、表土以下各層位からは多量の須恵器を採取することができた。

灰原から流れ込んだ遺物はトレンチ内東端からも検出された。遺構はみられず、旧地形の深さが表土下約1.15mであることが確認された。

(岡崎)

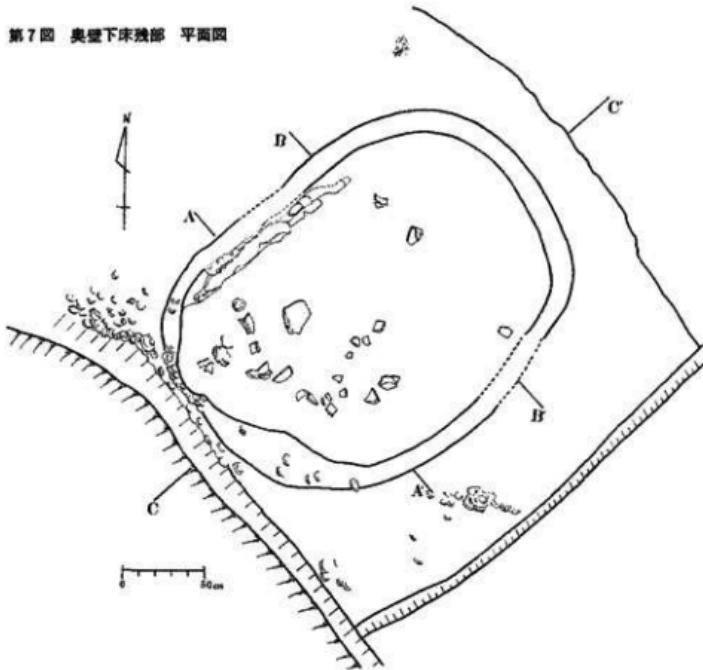
6. 窯の構造（奥壁下床残部）

窯の残部は標高107.50mと108.50mの間の丘陵上部に位置しており、地形上からも、また残存部分からいっても煙道近くの奥壁下部の床面にあたる箇所と思われた。

先ず残部全体を観察するために表土の排除を行なった。その結果、残部の範囲は南北2.50m、東西1.75mと馬蹄形に残っている窯床面を露出させた。床面の周囲には酸化した厚さ12cmの壁の一部が付着して残っていた。

窯の主体である燃焼部や焼成部はまったく喪失しており、20度余りに傾斜した山肌面に北より40度東へ振れた処に窯の上層端部を少し残しただけであった。ただ床右側の酸化面の一部分に厚さ16cmの還元壁の付着が目についた。窯床全域をみても残存する須恵器片は少なく、平底杯片と高台付杯、それに溶解して床面に付着したもの、他には器種、器形の不確かな小片など恐らく天井部を崩された時に落ち込んだと思われるものも含まれておらず、赤く酸化した砂質土塊と10cm前後の、これも表面に酸化跡のある自然礫が床面にあつただけである。この部分を

第7図 奥壁下床残部 平面図



断面で計測すると表土より床面まで約50cm、この間の17.8cmが酸化した床の厚さとなっている。

残床の状況は図示した如く（第7図）馬蹄形となっており天井部は何時頃からか削り取られてなくなり、窓跡部の南端は急に垂直に落ちた断崖状となっている。そのため窓の中心主体ではなく、奥壁下部の残床部からさがること5m程でようやく須恵器片の散乱する灰原の一角を確認できたのである。

須恵器片の散乱範囲と黒色土壤の分布する辺りを灰原とみてその広がりと、旧地形面を確認するための削土作業にかかる。それによって判明したことは、灰原上は黄色砂質土で覆われていた事、灰原の範囲は約10m四方であった事である。

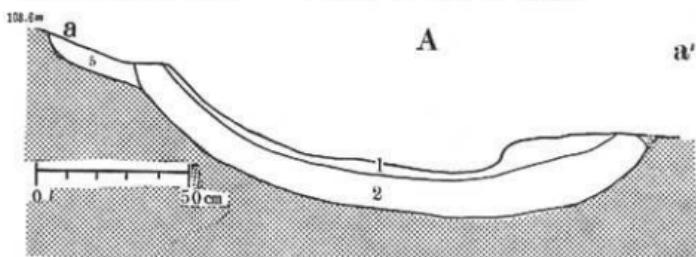
作業は10mの中で地形にあわせた任意の方眼網を組み、基準杭を設定し、約50cmの距離を残しながら各区画ごとに上層より順次地層の変化を観察しながら包含されている遺物の採集作業を行った。

灰原は調査の進行中に明らかとなっていたことではあるが必ずしも旧状態を保っていたのではなく、箇所によっては擾乱されたところもあった。そのこともあって採集された遺物も層位順の年代序列的になっておらず整理段階での年代決定を必要とするものであった。

この灰原内での西側に焼土層が、それと相対して東側に窓跡塊の遺存層があったのでそれについて少しふれておく。

焼土層の箇所は灰原の西寄り（図版第4参照）で南北約4m、東西約2.5mの範囲であった。層は西寄りに薄く、東寄りでやや厚くなっている。これも上層は幾分削除され、東端で厚みのある暗黒色の灰層となっていたから焼土のある位置は、傾斜した地形と残床部の距離からみて窓全体の燃焼部のあった部分ではなかったかと思われる。

第8図 奥壁下床残部 断面図 1 遺存層 2 酸化層 5 地山露層

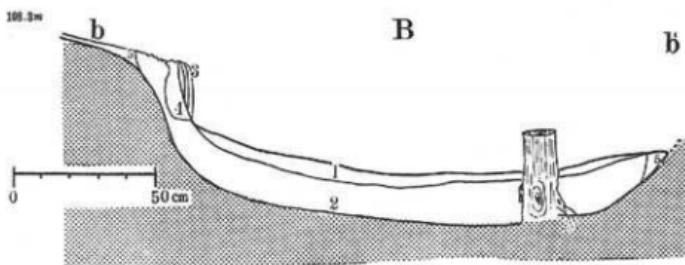


以上からすると、この焼土はもとのまではなく、幾度かの炎にあって変化した層であるか、土壤を一方に寄せた折に重なりあってしまったものかもしれない。そしてこの焼土層端から東へ約3.50mの処に淡青灰色をした窓跡壁片の大塊りが、先程の焼土層よりやや低い位置で、しかも灰原内の窓跡のかたちで混入していた。

この窓跡壁片と焼土層の存在位置は丘陵上部にある残床の中軸線をよけた左右に遺存するの

第9図 奥壁下床残部 断面図

1 遺元層 2 酸化層 3 窯壁 4 間層 5 地山礫層



であくまでも窯体破壊の際に碎かれて横側に避けて放置されたものと推察する。

焼土層も同様な意味で置かれたかもしれない。

窯体塊片を詳細にみれば薄く6層に区分できる。(灰原トレンチ断面図A参照)

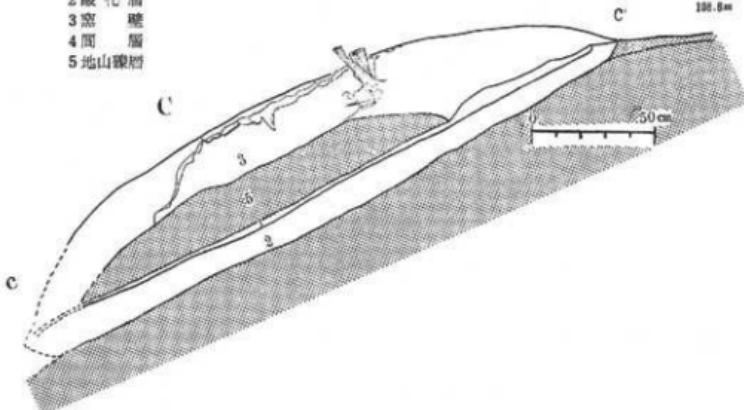
以上、この灰原全体の断面を最も移動をしていないとみられる部分で分層すると、1は焼土層、2淡黄色土層、3灰層、この灰層を上、下、焼土に、それから4淡黄色砂質土層となる。そしてこの灰原に含まれていた遺物の器種を大別すると、概して蓋杯が多く、次に甕の口縁部片、高台付杯身となっている。

上記の器種のうち、蓋杯の内・外には単純な刻線引をした窯印とみられるものに加えて明らかに漢字と読める文字もあったので総称してヘラ記号としておく。

(亥野)

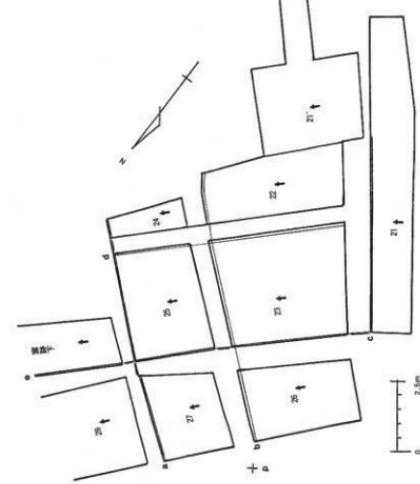
第10図 奥壁下床残部 断面立画図

- 1 遺元層
- 2 酸化層
- 3 窯壁
- 4 間層
- 5 地山礫層



第11図 灰原内トレンチ断面図計測壁面指示図

第12図 灰原トレンチ断面図 A



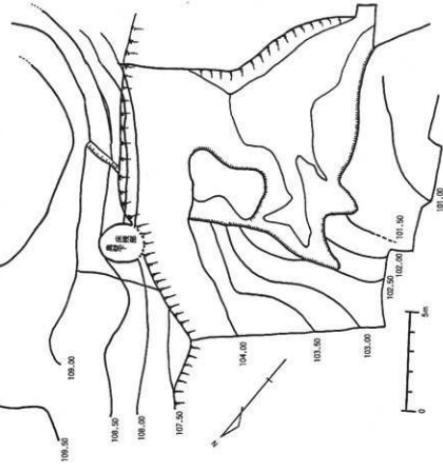
100.00 / 101.000 m

100.50

第13図 黒跡旧地形測量図

100.00 / 101.000 m

100.50



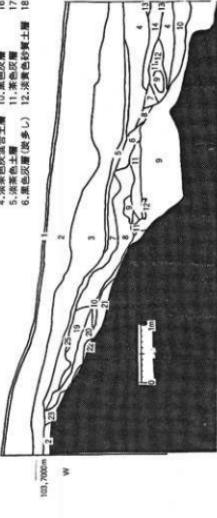
1. 赤土
2. 淡黄褐色土層
3. 淡褐色土層
4. 淡灰褐色土層
5. 淡褐色砂質土層
6. 淡褐色粘土層
7. 淡褐色土層
8. 淡褐色砂土層
9. 淡黃褐色土層
10. 淡黃褐色土層
11. 淡黃褐色土層
12. 淡黃褐色土層
13. 淡黃褐色土層
14. 淡黃褐色土層
15. 淡褐色土層
16. 淡褐色粘土層
17. 黑色灰層
18. 黑色土層
19. 黑色反覆層
20. 黑色土層
21. 黑色土層
22. 黑色土層
23. 黑色粘土層
24. 黑色反覆層
25. 淡黃褐色土層 (無七層)
26. 黑色反覆層
27. 淡黃褐色土層
28. 淡褐色土層
29. 淡褐色土層
30. 淡褐色粘土層
31. 淡褐色砂土層
32. 淡褐色砂土層

23. 淡褐色砂土層
A 黄褐色土层
B 淡黄褐色土层
C 淡灰褐色土层
D 淡褐色粘土层
E 淡黄色砂土层
F 淡黄色粘土层
G 隔层 (淡黄色粘土层)



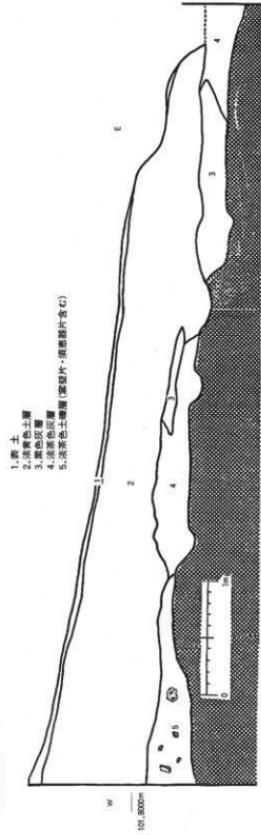
第13図 灰原トレンチ断面図 B

1. 黄土
2. 淡黄褐色土層
3. 淡褐色土層
4. 淡褐色粘土層
5. 淡黃褐色土層
6. 黑色反覆層
7. 淡褐色反覆層
8. 淡褐色土層
9. 淡褐色土層
10. 淡褐色土層
11. 黑色反覆層
12. 淡黃褐色土層
13. 淡褐色土層
14. 淡褐色土層
15. 淡褐色土層
16. 淡褐色土層
17. 淡黃褐色土層
18. 黑色反覆層
19. 淡褐色土層
20. 淡褐色土層
21. 淡褐色土層
22. 淡褐色土層
23. 淡黃褐色土層
24. 淡褐色土層
25. 淡褐色土層
26. 淡褐色土層
27. 淡褐色土層



第14図

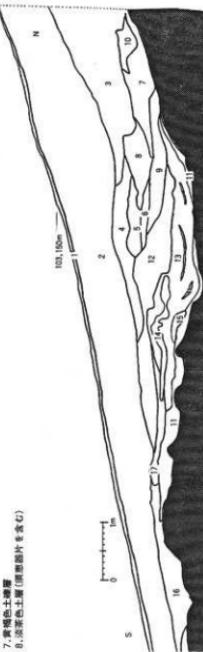
反原トレンチ断面図 C



第15図

反原トレンチ断面図 D

- 1. 黄土
2. 淡褐色土層 (透水している)
3. 淡褐色土層
4. 淡褐色土層 (透水性・透水片岩C)
5. 淡褐色土層 (透水性・透水片岩C)
6. 淡褐色土層
7. 黄褐色土層
8. 淡褐色土層 (須透水片岩C)
9. 淡褐色土層 (透水している)
10. 淡褐色土層
11. 淡褐色土層
12. 淡褐色土層
13. 淡褐色土層 (透水性・透水片岩C)
14. 黒褐色土層 (6番地より下に現れる)
15. 淡褐色土層
16. 淡褐色土層
17. 黄褐色土層
18. 黄褐色土層 (透水している)



第16図

反原トレンチ断面図 E

- 1. 黄土
2. 黄褐色土層 (半透水層)
3. 淡褐色土層
4. 淡褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
5. 淡褐色土層
6. 淡褐色土層
7. 黄褐色土層
8. 淡褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
9. 淡褐色土層
10. 黑褐色土層
11. シルト (10番より下では)
12. 黑褐色土層 (粘土層)
13. 黑褐色土層
14. 黑褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
15. 黑褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
16. 黑褐色土層
17. 黑褐色土層
18. 黑褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
19. 黑褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
20. 黑褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
21. 黑褐色土層 (透水性・須透水片岩C)
22. 砂、ブロック



7. 出土遺物の観察

本窯の出土遺物は、窯体内と灰原から出土したもので、窯自体の遺存状態が悪いため、その大多数が灰原からの出土である。須恵器は、杯蓋、杯身、壺、壺、長頸壺、短頸壺、高杯、搗鉢、円面鏡などであり、杯蓋、杯身、壺がその大多数を占めていた。

遺物は窯体内と灰原に分けて記し、個々の細かい説明は観察表にゆることにした。

(1) 窯体内 (第18図)

窯内の出土遺物は、窯の遺存状態が悪いため、実測可能な遺物はわずかに16点で他は小破片ばかりである。この16点の遺物はすべて杯であり、口縁部破片が9点(1~9)・底部破片が4点(10~13)である。この内1・3・8は口径が11~12cmと小さく、2・4・5・9は14~16cmで6・7・14~16は17~18cmと比較的大きいものである。底径は、4点とも10cm程度である。

遺物は全体的に焼成が悪く、焼き台に使用されたか、焼成途中で廃棄されたものと考えられる。

(2) 灰原内

蓋 (第19図)

蓋は、杯蓋(5~33)・短頸壺蓋(34・35)・特大蓋(36)とある。全体的に見ると、蓋1~4は口径が9~10cm、5~8は11~12cm、9~35は13~18cm、36が36.5cmとなっている。つまみの特徴は、4・13・25が擬宝珠形の大きなつまみを有し、22も同様なつまみを有すると考えられる。他は凹状のつまみ、擬宝珠形の退化した扁平なつまみであり扁平なつまみが大多数を占めてくる。4と22は口縁端部に内向するかえりを有し、天井部も丸く、深いことから、本窯内では一番古い遺物であると考えられる。しかし34・35の短頸壺の蓋では、口縁部は比較的垂直気味に下り、天井部も深くなっているので新しい時間のものと考えられる。

杯 (第20図)

杯は、1~4が小型のもので、5~25は平底、26~40が高台付きのものである。

全体的に見ると、1~4の口径は7~10cmで5~25は11~14cm、26~40は14~18cmであり、高台付の杯は口径も大きく深さも深くなっている。23は、受け部が水平に延び立ち上がりが短かく内向するものであり、この遺物は他のものよりも古く、他にも小片ではあるが数点ばかり出土している。高台はすべて底部境から八の字状に付くもので、杯作成後にハリツケられたものである。

鉢（第23図）

鉢は端部付近で大きく内向するもの（9・11）と上外方へ延びるもの（10・12）とに分かれれる。口径は22～31cmの間で12がやや大型のものである。10は錐鉢の口縁部とも考えられる。出土遺物内には錐鉢の底部3点があり、平底ばかりで外面に刺突痕を有するものがある。

高杯（第23図）

本窯では、脚部3点が確認されたのみである。杯部は見当らなかった。脚径は平均10cm程度である。13・15は外反しながら立ち上がり脚端部で大きくハの字状に開くものであり、14は上内向する脚であり、焼きひずみがある。

壺（第21図）

壺は、杯蓋、杯身に次いで出土数が多くその種類も豊富である。口径が11cm程度のものから50cmを越すものまである。口頭部は多少の違いはあるが基本的には「く」の字状を程し、壺部は内向するもの（2・3・7）、より外傾するもの（5）などがある。技術的には波状文を施すもの（8）、内・外面に平行、同心円文タタキを施すもの（7）がある。

壺（第22図）

壺は、長頸壺、短頸壺、広口壺の3種類に分かれ、口径も12cm程度の小型のものから50cm近くある大型のものまである。口頭部は大半が外反しながら立ち上がり端部が内向するもの（5・6・12・13）、そのまま丸くなるもの（3・4）があり、2は端部付近で更に立ち上がり、8はやや重れる。9の短頸壺は肩部に4個のつまみが付き、11の壺は2個の把手がつく。

技術的には腹部に平行、同心円文タタキを有するもの（12）があり、相対的に大型器種に多いようである。

皿（第23図）

皿については、高台付のもの4点が確認された。口径は14～26cmと幅があり、2～4の器種は大型である。

横瓶（第23図）

本窯では唯一の出土であるが、5は口頭部のみの破片であるため提瓶とも考えられる。

椀（第23図）

椀は口径が12～13cmの小型のもの（6・7）と、口縁部は欠損しているが高台を有する大型のもの（8）とがある。

(祭本)

円面鏡 (23図)

本市出土の鏡片は今回調査の分を入れて4点となった。以前のものは桜井谷窯跡群2-10窯からで獸足のついたもの1点、同窯群2-19窯から2点出土している。2-19窯での1点は下部の形状不明となっているが、他は直径14.3cmの円面に4本の脚をつけたものである。

鶴丘窯のものは円面上部片1点と脚片1点とが別に出土したのである。これらは丁度円面端の一角下と脚上面部とが一箇所接着しそうなものであるため同じ1箇体とみて復元図を作成してみた。それでみると総高8cm、円面座の直徑22.5cm、海(小清)の幅2cm、深さ1cm、脚には明らかにヘラで削ってあけたとみられる矩形の透しを四方にあけているようである。しかしその脚とても破片でしか残っておらず、透しの数も確認するものはわかっていない。ただ残部の透し部分からみると、その長さ2cm、幅5mm、透しの間隔約4cmを計測できたのでそれをもとに計算してみると脚部につくられた透しは約14箇所となる。

上部の陸は土程しか現存しておらず、表面も薄く1mm程度剥離している。海としての清は丁寧になでてつくられ陸の周辺をまわっている。

この鏡片の時期は伴出する須恵器の大部分が7世紀から8世紀にかけてのものであるから恐らく8世紀、即ち奈良時代に入っているものと推察する。そうみれば文字使用も盛行していた時代であるから後述のヘラ記号の漢字とも勘案して不自然ではなくなるであろう。

縁口 (図版第15)

縁口、器形は円筒形をした細長いものでその最長部では10cmを計測することができた。

遺物は一方が太く、他方がやや細くなってしまい、太い側での直徑は11cm、細い方では9.5cm、中央に抜け通っている空気穴の直徑3.5cmとなっている。こうした器形からみて陶窯での焼成火力を一層強めるために使用された縁の羽口に近い箇所と思われた。

この羽口には筋配りの粘土をかためて作られているため表面に多くの筋跡をついている。

さらに全体的に表面の剥離が甚しく、一見して小砂を粘土で固め、中央部に空洞をあけた塊りのようなものであった。これに類似した遺物は本市内の窯跡群中からは未だ検出されておらず、現在のところ唯一の資料と云えるだろう。

ヘラ記号

須恵器に記されていた記号の種類は表示しておいたが、単なる刻線引のもの8種と、火・西・口の文字のもつものからなっている。

灰原出土の土器を最も年代測定の基準となる杯蓋編年から概観すると(陶邑の編年を基として)蓋の天井部中央にやや高い宝珠形のつまみと口縁端部に内側へのかえりをもった小窪のものをみることができる。これに伴う杯身には高台を付けないものから安定した高台を貼付けたものまである。そうすれば、ごく一般的にいって宝珠形のつまみの出現を7世紀中頃に考えており大阪高歳寺窯跡編年からⅢの3段階から平たくなった蓋に低いつまみをもったところまでのⅣの3段階、即ち8世紀初頭のあたりまでを主とした窯とみてよからう。更に終末時を決め

るための資料として脚部に長方形のスカシを刻んでいたとみられる円面硯を灰原下層から検出したことであった。この硯石片はその形式からいって8世紀時代のものであるところから一応8世紀終焉を想定したものである。そうすれば文字の伝来以後にも土器生産は続いているから当然、硯の検出とも考えあわせて漢字の記入はあったはずである。

第1表 ヘラ記号文一覧表

番号	記号の種類	総数	蓋杯			蓋杯以外の器形	%
			蓋	身	部分不明		
1	大	13	上部外 6	底部裏 6	外側 1		1.2
2	西	7	上部内 3	底部裏 4			0.6
3	口	6		底部裏 5	1		0.55
4	×	45	上部外 5 上部内 1	底部内 17 底部裏 14	8		4.1
5	戈	2		外側 1		スリ跡底剝突痕 1	0.2
6	又は/か	25	上部外 2 上部内 1	底部内 5 底部裏 14	3		2.3
7	火	1		外側 1			0.1
8	く	4	上部外 2	底部表 2			0.3
9	ノ	3	上部外 1	底部内 1 底部裏 1			0.2
10	廿	1		底部裏 1			0.1
11	(ノ)	1			1		0.1
合計		108	21	72	14	1	

明らかに文字と認められるものは、大・西・口の三文字で全体の24%となっている。土器に文字を刻んだ例は、豊中市内の桜井谷窯跡群のうち2-19窯で、杯身の底面にへら抜きされた「利」の崩し字ともみられるものの検出が1点しられている。^⑤しかし、他は線引記号ばかりで文字はない。

記入された土器の器形は高台をもつ杯身、平つまみの付いた杯蓋の天井(つまみ横御)部につけられたものが多かった。尚、大の字と読めるものに大阪高藏寺2175窯跡出土の高台付杯身底部中央に記されたものがあることを付記しておく。(第25図、図版12・13参照)

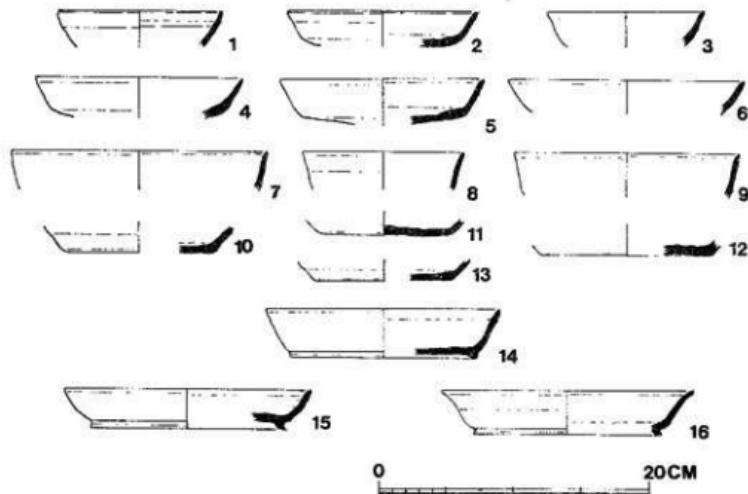
特にこうした文字記号を入れていることは単なる窯印的なことだけでなく、何か別の意味をもつものと考えられることから先の「利」あるいは陶邑KM 234号窯跡出土の陶棺に作者名とも解される7文字のあったことを考えあわせて注目すべき資料というべきである。

第2表

窯 体 内 須恵器一覧表

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 12.0 残存高 2.7	口縁部破片。 口縁部はやや内向ぎみに外傾し、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…良好
2	同上	口径 14.0 底径 10.4 残存高 2.5	口縁部は外傾し、端部は丸い。 底部は平底か。	底部外面は静止ナデ、 他は回転ナデ。	胎土…密 色調…乳褐色 焼成…不良
3	同上	口径 11.4 残存高 2.5	口縁部破片。口縁部は外傾し、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…乳褐色 焼成…不良
4	同上	口径 15.2 残存高 2.9	口縁部破片。口縁部は外傾し、端部はやや鋭い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(2mm大の砂粒を含む) 色調…乳褐色 焼成…不良 觸めつ難しい。
5	同上	口径 15.0 底径 11.5 残存高 3.3	口縁部は外傾し、端部は丸い。 底部は丸味を帯びる。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…淡乳褐色 焼成…不良
6	同上	口径 17.2 残存高 2.4	口縁部端片。 口縁部は外傾し、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…良好
7	同上	口径 18.8 残存高 2.9	口縁部破片。口縁部は外傾し、端部はやや鋭い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…淡乳褐色(内や暗) 焼成…不良
8	同上	口径 11.8 残存高 2.8	口縁部破片。口縁部は外傾し、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…淡乳褐色(内や暗) 焼成…不良
9	同上	口径 16.4 残存高 3.2	口縁部破片。口縁部は外傾し、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…乳灰色 焼成…不良
10	同上	底径 10.5 残存高 1.8	底部破片。底部は平底。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…乳灰褐色 焼成…不良
11	同上	底径 10.0 残存高 1.2	底部破片。底部は平底。	底部外面はヘラ切り、 他は回転ナデ。	胎土…密 色調…乳褐色 焼成…不良
12	同上	底径 13.2 残存高 1.1	底部破片。底部は平底。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	胎土…密(3mm大の砂粒を多量に含む) 色調…灰黄色 焼成…良好
13	同上	底径 10.2 残存高 1.4	底部破片。底部は平底。	底部外面は回転ヘラケズリ。	胎土…密 色調…乳褐色 焼成…不良

	口 径 17.2 高台径 13.8 器 高 3.6	口縁部はやや丸味を帯びて外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き、端部は丸い。 底部は平底で深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナメ。	胎土…密 色調…黄褐色 焼成…不良 磨めつ激しい。	
14	杯				
15	同 上	口 径 18.2 高台径 14.3 器 高 2.9	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き、端部は丸い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナメ。	胎土…やや粗 色調…淡灰色 焼成…良好
16	同 上	口 径 18.4 高台径 13.8 器 高 3.3	底部欠損。口縁部は大きく外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状の高台が付き、端部は丸い。	内外面とも回転ナメ。	胎土…密 色調…灰黄色 焼成…良好



第18図 窟体内土器実測図

灰 原 内 須恵器一覧表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	蓋	口径 9.4 器高 2.05 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部はハの字状に下り、端部は鋭い。天井部はやや下がり深い。中央に扁平な擬宝珠形つまみが付く。	天井部内面は静止ナデ、他は回転ナデ。	粘土…密 色調…灰褐色 焼成…良好
2	同上	口径 9.6 器高 1.7 つまみ径 2.3 つまみ高 0.8	口縁部は短くやや内凹きして下がり、端部は丸い。天井部は平らで低く中央部に扁平な擬宝珠形つまみが付く。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	粘土…やや粗 色調…淡灰褐色 焼成…良好
3	同上	口径 10.0 器高 1.4 つまみ径 2.3 つまみ高 0.5	口縁部は内向して下がり、端部は丸い。天井部は平らでやや下がり低い。中央部に扁平なつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は静止ナデ、他は回転ナデ。	粘土…やや粗 色調…暗灰褐色 焼成…やや不良
4	同上	口径 10.2 器高 3.1 つまみ径 1.1 つまみ高 1.0	口縁部は丸く、内向するかえりを有し、かえり端部は鋭い。天井部は丸く、深い。中央に擬宝珠形つまみが付く。	天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は静止ナデ。他は回転ナデ。	粘土…密 色調…暗灰褐色 焼成…良好 天井部外面にヘラ記号(-)有り
5	同上	口径 11.0 器高 1.9 つまみ径 2.0 つまみ高 0.6	口縁部は内向し、短かく、端部は丸い。天井部は平らでやや下がる。中央に扁平なつまみが付く。	天井部内面中央部静止ナデ、他は回転ナデ。	粘土…密 色調…灰褐色 焼成…良好
6	同上	口径 11.6 器高 1.3 つまみ径 2.3 つまみ高 0.3	口縁部は内向し短かく、端部は鋭い。天井部は平らでやや下がる。巾に扁平なつまみが付く。	天井部内面中央部静止ナデ、他は回転ナデ。	粘土…密(3mm大の砂粒を含む) 色調…灰褐色(豚肉はやや黄色が強い) 焼成…良好
7	同上	口径 12.6 器高 1.6 つまみ径 2.2 つまみ高 0.3	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は丸く、中央に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	粘土…やや粗 色調…淡灰褐色 焼成…良好
8	同上	口径 11.6 器高 1.4 つまみ径 2.1 つまみ高 0.3	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平らで、やや下がる。中央に扁平なつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	粘土…密 色調…淡灰褐色 焼成…良好 外面に一部自然釉付着
9	同上	口径 15.2 器高 2.2 つまみ径 2.8 つまみ高 0.9	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら、中央に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	粘土…銀(3mm以下砂粒を含む) 色調…淡灰褐色 焼成…不良
10	同上	口径 13.6 器高 2.7 つまみ径 2.7 つまみ高 0.4	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は丸く、やや右よりに扁平なつまみが付く。	天井部外面は静止ナデ、他は回転ナデ。	粘土…密 色調…黄褐色 焼成…やや不良

11	蓋	口 径 13.3 器 高 2.5 つまみ径 2.4 つまみ高 0.5	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平らでやや下り深い。中央部にはうすい凹状のつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。 つまみははめ込み。	胎土…粗 色調…淡灰色 焼成…やや良
12	同 上	口 径 15.0 器 高 2.0 つまみ径 2.6 つまみ高 0.4	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平らで、やや下る。中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…粗(2mm以下砂粒を含む) 色調…淡灰色 焼成…不良
13	同 上	口 径 17.5 器 高 2.8 つまみ径 3.0 つまみ高 1.6	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平らでやや下がる。中央部に瓣状珠形つまみが付く。	内面は静止ナデ。 外面は回転ナデ。	胎土…密(1mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰黄色 焼成…良好
14	同 上	口 径 15.2 器 高 3.2 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平らで深い。中央部に扁平なつまみが付く。	天井部内面中央部は静止ナデ、他は回転ナデ。	胎土…やや粗(3mm以下の砂粒を多量に含む) 色調…灰黄色(内面はやや茶がついている) 焼成…良好
15	同 上	口 径 14.5 器 高 2.5 つまみ径 3.3 つまみ高 0.6	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部はやや平らで下がり深い。中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(3mm以下の砂粒を含む) 色調…暗灰黄色 焼成…良好
16	同 上	口 径 17.0 器 高 2.6 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら、中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(2mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色(外面やや暗) 焼成…良好
17	同 上	口 径 16.0 器 高 2.7 つまみ径 2.9 つまみ高 0.8	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら。中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。つまみは、はめ込み。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…良好
18	同 上	口 径 17.0 器 高 2.8 つまみ径 2.7 つまみ高 0.8	口縁部は内向し、端部はやや鋸く短かい。天井部は平らでやや下がる。中央部に凹状のつまみが付く。	つまみ・口縁部以外の外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…淡赤褐色 焼成…不良
19	同 上	口 径 17.2 器 高 2.4 つまみ径 2.8 つまみ高 0.8	口縁部は内向し、端部はやや鋸く短かい。天井部は平らでやや下がる。中央部に凹平なつまみが付く。	内・外面とも同伝ナデ。内面の口縁部から天井部にかけては後静止ナデ。	胎土…やや粗(5mmの大砂礫1個を含む) 色調…淡灰黄色(内面やや暗) 焼成…やや良
20	同 上	口 径 17.3 器 高 2.4 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部はやや内向し、端部は丸い。天井部は平行でやや下がる。中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ、内面天井部は後静止ナデ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…やや不良
21	同 上	口 径 17.6 器 高 2.5 つまみ径 2.6 つまみ高 0.6	口縁部は内向し、端部は丸く短かい。天井部は平らでやや左よりに凹状のつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。天井部中央は後静止ナデ。	胎土…やや粗 色調…黄灰色 焼成…不良

22	蓋	口 径 17.6 残存高 2.75 つまみ径—— つまみ高——	口縁端部は丸く、内向するかえりを有し、かえり端部は艶い。天井部は丸く深い。つまみ欠損。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	胎土……やや粗 色調…内：灰白色 外、器内：黄灰色 焼成…良
23	同 上	口 径 15.9 器 高 2.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.7	口縁部は内向し、端部は丸く短かい。天井部は平らでやや下がる。中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ、天井部内面中央は後静止ナデ。	胎土…やや粗 色調…淡灰色 焼成…良
24	同 上	口 径 17.4 器 高 1.65 つまみ径 2.9 つまみ高 0.5	口縁部はやや内向し、端部は丸い。天井部は平らでやや下がる。中央部に凹状のつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ、天井部内面中央は後静止ナデ。	胎土…やや粗(5mmの大砂粒を多量に含む) 色調…淡灰色 焼成…良好
25	同 上	口 径 18.1 器 高 3.1 つまみ径 2.4 つまみ高 1.6	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部はやや丸く下がる。中央部に擬宝珠形つまみが付く。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	胎土…密 色調…乳灰色 焼成…不良
26	同 上	口 径 16.2 器 高 3.4 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら、中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…粗(2mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色 焼成…不良
27	同 上	口 径 17.5 器 高 1.9 つまみ径 2.8 つまみ高 0.6	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平らでやや下がる。中央部に扁平なつまみが付く。	多面・内面天井部へのかかりまで回転ナデ、内面%は静止ナデ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…良好
28	同 上	口 径 17.8 器 高 1.9 つまみ径 3.6 つまみ高 0.6	口縁部はやや内向し、端部は丸い。天井部はやや平らで下がる。中央部に扁平なつまみが付く。	外面・内面天井部は回転ナデ、内面天井部は静止ナデ。	胎土…密(2mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色(内さらには) 焼成…良好
29	同 上	口 径 19.3 器 高 2.0 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら、中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…粗 色調…黄灰色 焼成…不良
30	同 上	口 径 17.7 器 高 2.8 つまみ径 2.7 つまみ高 0.7	口縁部は内向し、端部は艶い。天井部は平ら、やや右よりに扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。内面天井部は後静止ナデ。	胎土…やや粗(3mmの大砂粒を多量に含む) 色調…淡灰黄色 焼成…やや不良
31	同 上	口 径 18.5 器 高 2.75 つまみ径 3.1 つまみ高 0.6	口縁部は内向し、端部は艶い。天井部は平らでやや下がる。中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…灰黄色(外やや暗) 焼成…やや不良
32	同 上	口 径 18.0 器 高 3.4 つまみ径 3.4 つまみ高 0.5	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら、中央部に扁平なつまみが付く。	天井部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	胎土…粗(2mm以下の砂粒を含む) 色調…内：暗灰黑色、外：淡灰色、器内：赤味を帯びた灰黑色 焼成…やや不良

33	蓋	口径 17.1 器高 3.1 つまみ径 2.9 つまみ高 0.6	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら、やや左より扁平なつまみが付く。	外面口縁部以外回転ヘラケズリ、他は回転ナデ、内面天井部は後静止ナデ。	胎土…密 色調…暗灰色 焼成…良好
34	同上	口径 13.1 器高 4.7 つまみ径 3.6 つまみ高 2.0	口縁部は外傾して下がり端部は丸い。天井部はやや丸く深い。中央部に扁平なつまみが付く。	内・外面とも回転ナデ、内・外面天井部は後静止ナデ。つまみは、はめ込み。	胎土…密(4mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色 焼成…良好
35	同上	口径 19.0 器高 3.35 つまみ径 3.2 つまみ高 1.0	口縁部は外傾して下がり、端部は平ら。天井部は大きく凹む。中央部に扁平なつまみが付く。	外面天井部殆どは回転ヘラケズリ他は回転ナデ、内面天井部殆どは後静止ナデ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…やや不良
36	同上	口径 35.6 残存高 4.7 つまみ径— つまみ高—	口縁部は内向し、端部は丸い。天井部は平ら。つまみ欠損。	内外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…淡灰黄色 焼成…良

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	杯	口径 10.3 底径 7.1 器高 3.4	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平坦面を持たない。	底部外面殆どは回転ヘラケズリ。他はすべて回転ナデ。	胎土…粗 色調…淡赤褐色 焼成…不良
2	同上	口径 8.5 底径 5.8 器高 3.7	口縁部は外傾し、端部は丸い。胸部と底部の境でやや張り出した後に丸みを帯びた底部へと続く。	内・外面とも底部は静止ナデ。他は回転ナデ。	胎土…密 色調…灰黄色(外は暗) 焼成…良好 外面に自然釉着付
3	同上	口径 7.2 底径 6.1 器高 1.9	口縁部は外傾し、端部は丸く、肥厚する。胸部と底部の境でやや張り出した後丸味を帯びた底部へと続く。	底部外面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…灰黄色 焼成…良
4	同上	口径 9.0 底径 6.7 器高 3.1	口縁部は外傾し、端部は丸い。胸部と底部の境は角ばり、底部は尖底気味である	内・外面とも回転ナデ。	胎土…粗 色調…内：淡灰色・外：灰黄色 焼成…良好 天井内部にヘラ配骨(x)有り。
5	同上	口径 11.3 底径 6.8 器高 3.3	口縁部は外傾し、端部は丸い。胸部末でやや張り出した後丸い底部へと続く。	内・外面とも底部は静止ナデ。(外面はやや粗い)、他は回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…乳黄色 焼成…不良
6	同上	口径 13.9 底径 10.6 器高 2.7	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平ら。	底部外面ヘラ切り、内面静止ナデ。他は回転ナデ。	胎土…やや粗(2mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰黄色 焼成…良好

7	同上	口径 14.2 底径 11.6 器高 2.8	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平底。	底部外面へラ切り、他は回転ナデ。	胎土…密(2mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰黄色 焼成…良好
8	同上	口径 11.9 底径 8.5 器高 3.5	口縁部はやや丸みをもつて外傾し端部は丸い。底部は丸みをもつ。	底部外面中央はへラ切り、内面は静止ナデ、他は回転ナデ。	胎土…粗 色調…淡黄灰色 焼成…良好
9	同上	口径 14.0 底径 10.6 器高 2.7	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平底	底部外面回転へラケズリ。他は回転ナデ	胎土…粗 色調…赤褐色 焼成…不良
10	同上	口径 13.5 底径 10.9 器高 3.1	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部はゆるい弧を描くような傾斜をなす。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…灰黄色 焼成…良
11	同上	口径 13.0 底径 9.0 器高 3.7	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は丸みを帯び深い。	底部外面は回転へラケズリ、内面中央部静止ナデ、他は回転ナデ。	胎土…密 色調…暗灰色 焼成…良好
12	同上	口径 14.6 底径 11.6 器高 2.5	口縁部は丸みを帯びて外傾し、端部は丸い。底部は平底。	底部外面へラ切り、他は回転ナデ。	胎土…密(微砂) 色調…灰黄色 焼成…良
13	同上	口径 12.6 底径 9.7 器高 2.75	口縁部は外傾し、端部はやや鋭い。底部は平底。器壁は薄い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(3mm以下の砂粒を多量に含む) 色調…灰黄色、器肉：暗灰色 焼成…やや不良 底部内面にへラ記号(サ)有り、 外面に自然釉付着。
14	同上	口径 13.3 底径 9.9 器高 3.2	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平らでやや上け底である。	底部外面は静止ナデか。他はすべて回転ナデ。	胎土…粗 色調…灰色 焼成…不良
15	同上	口径 14.0 底径 10.7 器高 3.5	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部はやや丸みを帯びる。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…淡灰黄色 焼成…良好
16	同上	口径 13.2 底径 9.9 器高 3.2	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平底で深い。	底部外面はへラ切り 他は回転ナデ。	胎土…やや粗(4mm大の砂礫2個、2mm以下の砂粒含む) 色調…暗灰黄色 焼成…良好
17	同上	口径 12.0 底径 8.7 器高 3.5	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部はやや上け底氣味。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗(3mm以下の砂粒を含む) 色調…やや暗灰色 焼成…良
18	同上	口径 14.2 底径 10.25 器高 3.0	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部はやや上げ底氣味。	底部外面中央は静止ナデ。他は回転ナデ。	胎土…やや粗(3mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色 焼成…良好

19	同 上	口 径 13.5 底 径 10.9 器 高 3.1	口縁部はやや丸味を帯びて外傾し、端部は丸い。底部は平底。	底部外面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…黄灰色 焼成…やや不良
20	同 上	口 径 13.0 底 径 10.1 器 高 3.2	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平らであるが中央部で尖底になる。	底部外面は回転ヘラケズリ、他はすべて回転ナデ。	胎土…粗(2mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色 焼成…やや不良
21	同 上	口 径 13.4 底 径 8.2 器 高 3.0	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は上げ底。	底部外面ヘラ切り、他は回転ナデ。	胎土…やや粗(2mm以下の砂粒を含む) 色調…灰黄色 焼成…やや不良
22	同 上	口 径 13.6 底 径 9.7 器 高 2.9	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は平底。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	胎土…粗 色調…黄灰色 焼成…やや不良
23	同 上	口 径 11.5 受部径 12.7 残存高 2.55	立ち上がりは内向し、端部は丸い。受け部はほぼ水平に延び端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…暗灰色 焼成…良好
24	同 上	口 径 14.8 底 径 10.8 器 高 3.3	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部はやや丸みを帯びる。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	胎土…密 色調…灰褐色 焼成…良
25	同 上	口 径 13.5 底 径 10.4 器 高 2.85	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は上げ底。	底部外面は回転ヘラケズリ後静止ナデ、他は回転ナデ、底部内面は後静止ナデ。	胎土…密(8mm程の砂粒少量含む) 色調…灰黄色 焼成…良好
26	同 上	口 径 17.6 高台径 13.2 器 高 3.6	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部窓からハの字状に高台が付き端部は丸い。底部は平底で深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面は静止ナデ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…淡灰色(外は暗) 焼成…良好
27	同 上	口 径 15.4 高台径 11.3 器 高 3.8	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部窓からハの字状に高台が付き、内、外面とも接地し、端部は外が丸く内が窓で、底部は丸みをおび中央で接地し深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面静止ナデ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…良好
28	同 上	口 径 17.6 高台径 14.5 器 高 3.9	口縁部は丸味を帯びて外傾し、端部は窓。底部窓でハの字状に高台が付き、内で接地し、端部は丸い。底部は丸みをおびて深い。	底部外面は回転ヘラケズリ後静止ナデ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…良
29	同 上	口 径 15.2 高台径 11.4 器 高 3.0	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部窓でハの字状に高台が付き、端部は丸い。底部は上げ底で深い。	底部外面中央は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…灰黄色 焼成…良好
30	同 上	口 径 17.3 高台径 12.5 器 高 4.0	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部窓でハの字状に高台が付き端部は丸い。底部は上げ底で深い。	内外面とも回転ナデ、後に底部は静止ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…不良

31	同 上	口 径 17.4 高台径 13.5 器 高 3.5	口縁部は丸味を帯びて外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き端部は丸い。底部は丸く中央部で接地し深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…粗 色調…淡灰黄色 焼成…良好
32	同 上	口 径 16.0 高台径 13.0 器 高 3.6	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き端部は丸い。底部は丸く中央部で接地し深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…淡黄褐色 焼成…不良
33	同 上	口 径 15.6 高台径 12.2 器 高 3.3	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き端部は丸い。底部は上げ度で深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…やや粗 色調…外：暗灰色、内：墨水淡黄褐色 焼成…不良
34	同 上	口 径 17.2 高台径 14.5 器 高 4.0	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き、端部は丸い。底部は丸みを含む中央で接地し深い。	底部外面回転ヘラズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…想(3mm以下の砂粒を含む) 色調…暗灰色 焼成…良
35	同 上	口 径 18.0 高台径 14.6 器 高 3.0	口縁部は丸味を帯びて外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状の高径が付き、端部は丸い。底部は上げ底。	内・外面とも回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…やや粗(2mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰黄色 焼成…やや良 底部外面にヘラ記号(△)有り
36	同 上	口 径 14.6 高台径 10.6 器 高 3.5	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き、端部は丸く内で接地する。底部は丸味を帯び深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…やや粗 色調…様淡灰色 焼成…やや不良
37	同 上	口 径 17.0 高台径 13.6 器 高 3.9	口縁部はやや丸味を帯びて外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き端部は丸く、内で接地する。底部は丸みを含む深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…やや粗(4mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色 焼成…良
38	同 上	口 径 16.2 高台径 13.2 器 高 4.4	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き、端部は丸い。底部は丸味を帯び深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…想(3mm以下の砂粒を含む) 色調…暗灰色 焼成…良好 内面に自然釉付着
39	同 上	口 径 18.6 高台径 14.6 器 高 4.5	口縁部は外傾し端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き、端部は丸い。底部は上げ底で器壁が厚く深い。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…暗灰色 焼成…良好 底部外面にヘラ記号(×)有り。
40	同 上	口 径 14.6 高台径 11.4 器 高 3.8	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部境でハの字状に高台が付き、端部は丸く、内で接地する。底部は平らで深い。	底部外面は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…やや粗(3mm以下の砂粒を含む) 色調…淡灰色 焼成…不良

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	蓋	口 径 14.9 残存高 9.9	口頸部破片。口頸部は上方へ長くのび、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…明黄褐色 焼成…不良
2	同 上	口 径 12.9 残存高 2.05	口頸部破片。口頸部は外反し、端部付近でやや垂直気味に立ち上がる、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗(2mm人の砂粒を含む) 色調…内:灰黃色、外:淡灰黃色、器内:黃褐色 焼成…やや不良
3	同 上	口 径 12.0 残存高 2.9	口頸部破片。口頸部は外反氣味に立ち上がり、端部付近で水平に開く。端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(2mm人の砂粒を含む) 色調…暗灰褐色 焼成…良好
4	同 上	口 径 13.2 残存高 13.4	口頸部破片。口頸部は外反しながら長く立ち上がり、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(4mm程の砂粒を少量含む) 色調…淡黃灰色 焼成…やや不良
5	同 上	口 径 14.9 残存高 6.9	頸部はゆるく外反しながら立ち上がり口縁部で大きく上方へ開き、端部付近で内向し端部は丸い。肩部はハの字状に開き、腹部はやや垂直に下る。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…内・外: 暗灰色、器内: 茶褐色 焼成…良好
6	同 上	口 径 15.9 残存高 6.4	口頸部破片。頸部はゆるく外反しながら立ち上がり、口縁部で大きく上方へ開き、端部付近で内向し、端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…暗灰色 焼成…良好
7	同 上	底 径 4.0 脚部最大径 12.8 残存高 5.7	口縁部欠損。頸部はほぼ垂直に立ち上がる。頸部は逆くの字状になり、最大径は上方にある。底部は平底。	外面、底部下半から底部は静止ナデ。内面底部は回転ヘラケズリ後静止ナデ、他の回転ナデ。	胎土…密(3mm人の砂粒を含む) 色調…内:灰黃色、器内:茶褐色 焼成…良
8	同 上	口 径 18.2 残存高 4.8	口頸部破片。口頸部は外反しながら立ち上がり端部付近でやや下がる。端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗(2mm人の砂粒を含む) 色調…やや暗灰色 焼成…良好
9	同 上	口 径 10.7 残存高 3.7	口頸部はやや上方に短かく立ちあがり、端部は丸い。肩部は大きくハの字状に開き、頸部端でやや内向気味に頸部へ続く。ほぼ4等分に頸部端でつまみが4個つく。	つまみ部はヘラケズリ後ナデ。他の回転ナデ。つまみはほりつけ。	胎土…密 色調…灰黃色 焼成…良好
10	同 上	口 径 16.0 残存高 5.2	口頸部はやや内向しながら立ちあがり、端部は丸い。肩部は丸味をおびて大きくハの字状に開く。	口頸部内外面は回転ナデ。脚部外面は平行タキ、内面は同心円文タキ。	胎土…密 色調…淡灰色 焼成…良好

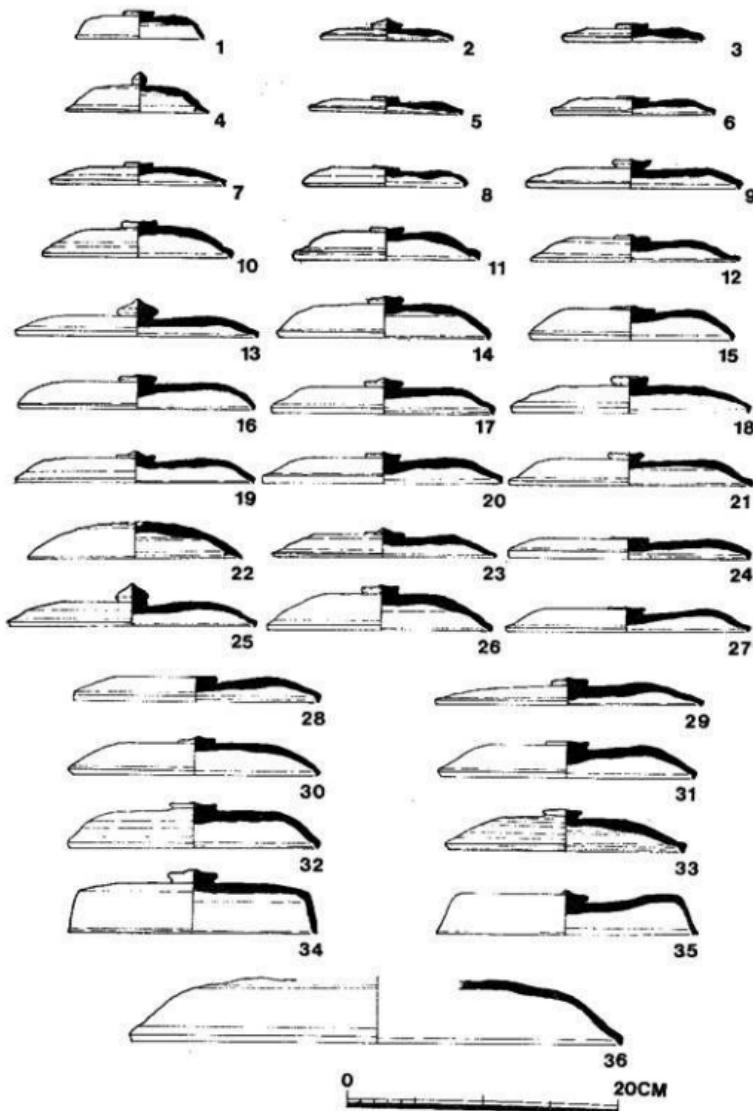
11	壺	口径 35.8 残存高 7.2	口頸部は上外方にのび、端部付近でやや内向し、端部は丸い。肩部はハの字状に開く肩部から2箇の把手が付く。	肩部外面は平行タタキ後静止ナデ、内面は同心円文タタキ。把手は静止ナデ、他は回転ナデ、把手はハリツケ。	胎土…密 色調…淡灰茶色 焼成…やや不良
12	同 上	口径 40.0 残存高 10.6	口頸部破片。口頸部は大きく外反しながら立ち上がり、端部付近で内向し端部はやや斜い。	肩部外面は平行タタキ内面は同心円文タタキ。他は回転ナデ。	胎土…密(3mm大の砂粒を少量含む) 色調…灰黄色 焼成…良好
13	同 上	口径 47.0 残存高 8.6	口頸部破片。口頸部は大きく外反しながら立ち上がり、端部付近でやや下がり内向する。端部は丸い。	内外面とも回転ナデ。	胎土…密 色調…淡灰茶色 焼成…良好 外面に自然釉付着

1	壺	口径 20.0 残存高 4.9	口頸部破片。口頸部は外傾し、端部でやや内向し、かうい凹面をなす。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…土質(2mm大の砂粒を多量に含む)1cm大の石を含む) 色調…灰黄色 焼成…良好
2	同 上	口径 23.0 残存高 5.5	口頸部破片。口頸部は上外方へのび、端部で内向し、丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(2mm大の砂粒を多量に含む) 色調…灰黄色 焼成…良好
3	同 上	口径 21.4 残存高 6.4	口頸部破片。口頸部は上外方へのび端部で内向し丸い。	肩部外面は平行タタキ。内面は同心円文タタキ。他は回転ナデ。タタキは磨めつにより痕跡のみ。	胎土…密(2-3mm大の砂粒を多量に含む) 色調…乳黄色 焼成…不良
4	同 上	口径 25.8 肩部最大径 25.8 残存高 7.8	口頸部は、上外方へ屈かくのび端部は丸い。肩から肩部へはや丸みを有し逆くの字状になる。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗(5mm大の砂粒を含む) 色調…灰黄色(外はやや暗) 焼成…良好
5	同 上	口径 21.4 残存高 4.4	口頸部はやや垂直気味に立ち上がり、端部付近で大きく上外方へ開く、端部は丸い。肩部から肩部へは大きくハの字状に開く。	肩、頬部外面は平行タタキ、頬部内面は指頭圧痕。他は回転ナデ。	胎土…密(2mm大の砂粒を含む) 色調…内・外・淡灰黄色、器内：褐色 焼成…不良
6	同 上	口径 36.45 残存高 12.65	口頸部は外方へのび、端部は平ら、肩部はゆるやかな丸味を帯びる。	肩部外面は平行タタキ、他は回転ナデ。	胎土…密 色調…内・器内：灰黄色 外：灰茶色 焼成…良好
7	同 上	口径 31.0 残存高 13.9	口頸部は上外方へ大きく開き、肩部で内向し丸い。肩部は大きくハの字状に開く。	肩部外面上方平行タタキ後ハケ目、内面は同心文タタキ。他は回転ナデ。	胎土…密(3mm大の砂粒を多量に含む) 色調…灰黄色(外はやや淡) 焼成…良好
8	同 上	口径 50.4 残存高 11.65	口頸部は大きく上外方へ開き、端部は肥厚し丸い。8条と7条の波状文を2段に施す。	内外面とも回転ナデ。頬部外面は後静止ナデ。	胎土…やや粗 色調…淡灰茶色 焼成…良好

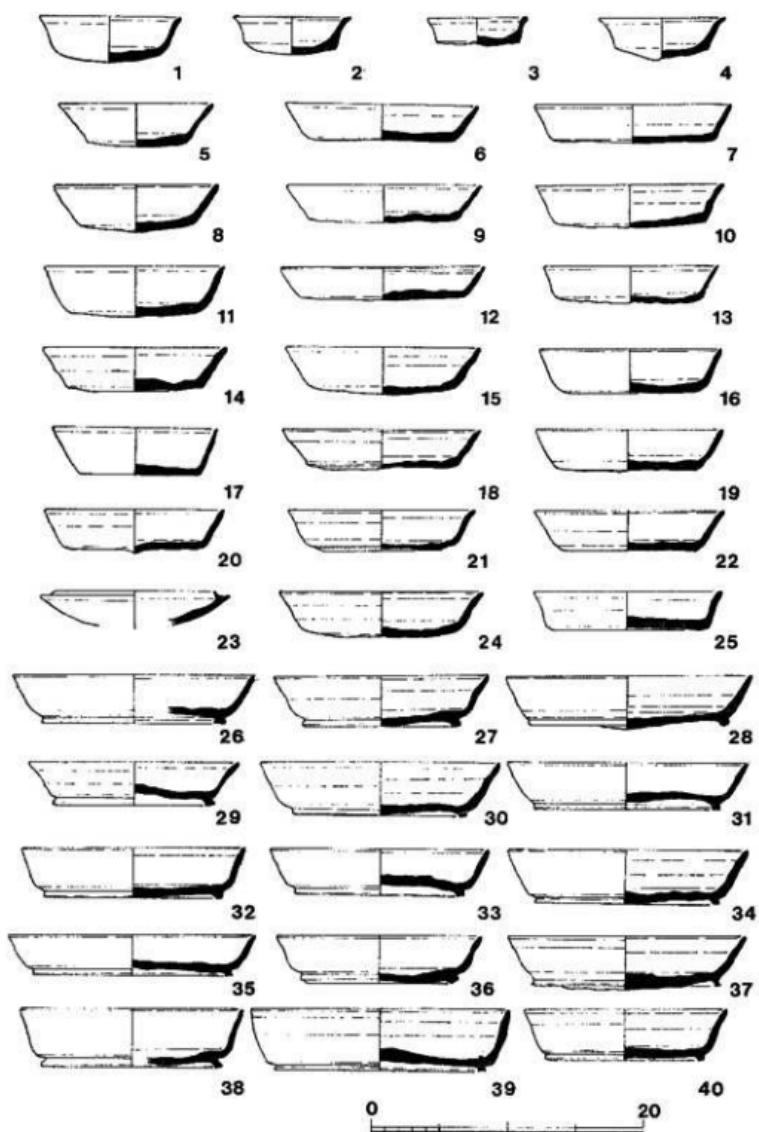
番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	台付皿	口径 14.8 高台径 9.2 器高 2.9	口縁部は丸味をおびて上方へ立ち上がり端部は丸い。底部境でハの字状の高台が付く端部は丸い。底部は丸味をおびて下る。	底部外面は回転ヘラケズリ後静止ナデ、内面は静止ナデ、他は回転ナデ。	胎土…やや粗 色調…淡灰色 焼成…良好
2	同上	口径 25.6 高台径 14.2 器高 3.5	口縁部は丸味をおびて上方へ開き、端部は丸い。底部境でハの字状の高台が付く端部は丸い。底部は平底。	底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…淡灰黄色(外はやや暗) 焼成…良好
3	同上	口径 26.2 高台径 12.2 器高 3.25	口縁部はやや丸味をおびて外方へ立ち上がり端部は丸い。底部境でハの字状の高台が付く端部は丸い。底部はやや下がる。	内・外面とも回転ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密(3mm以下の砂粒を多量に含む) 色調…灰黄色 焼成…良好
4	同上	口径 — 高台 14.9 器高 4.3	胴部は丸味を帯びて開き、底部境でハの字状の高台が付く、端部は丸く、器壁は厚い。底部は平底。	内面は指頭圧痕、外面は底部、高台は回転ナデ、胴部は斜右下がり方向ハケ目。	胎土…密 色調…淡灰黄色 焼成…良好
5	横瓶	口径 7.0 残存高 5.7	口縁部破片。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部は丸い。頸部から肩部へはほぼ直角にまがる。	肩部内面は静止ナデ、他は回転ナデ。	胎土…密 色調…暗灰色 焼成…良好
6	瓶	口径 13.2 残存高 5.0	口縁部は外傾し、端部は丸い。底部は深く、平底面をほとんど持たない。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…やや粗(2mm以下の砂粒を含む) 色調…暗灰色 焼成…やや良
7	同上	口径 12.0 底径 9.0 器高 4.25	口縁部は丸味を帯びて立ち上がり、端部付近でやや内向し、端部は丸い。底部は平底。	底部外面は%は回転ヘラケズリ。他はすべてナデ。	胎土…粗 色調…黄灰色 焼成…やや良
8	台付瓶	口径 — 高台径 9.0 残存高 8.1	口縁部欠損。肩部は球形で底部境でハの字状の高台が付く。端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ、底部下半内面は後静止ナデ。高台はハリツケ。	胎土…密 色調…暗灰色(器内や淡) 焼成…良好
9	鉢	口径 24.2 残存高 8.3	脇部は丸味を帯び、口縁端部は内向し、端部は丸い。脇部は下内向する。	内・外面とも面転ナデ。	胎土…密 色調…淡灰黄色 焼成…やや不良
10	同上	口径 25.2 残存高 6.2	口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部は平らで肥厚する。脇部は下内向する。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(2mm程の砂粒を多量に含む) 色調…淡灰黄色 焼成…良好

11	鉢	口径 22.6 残存高 3.2	口縁部破片。口縁部は内向し、端部は凸をなす。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(2mm粒の砂粒を含む) 色調…灰黃色 焼成…良好
12	同 上	口径 31.4 残存高 5.35	口縁部は内向し、端部は平ら。腹部は下内向する。	内・外面とも面転ナデ。	胎土…密 色調…淡灰黃色 焼成…やや不良
13	高 杯	脚 径 9.6 残存高 7.4	杯部欠損。脚部はゆるく外反しながら立ち上がる。端部付近で大きくハの字状に開き、端部は丸い。杯部境内上外方へ延びる。	脚部は内・外面とも回転ナデ。杯部底部内面は静止ナデ。	胎土…密 色調…淡灰黃色(外は黄がやや強い) 焼成…良好
14	脚	脚 径 25.2 残存高 7.65	脚部破片。脚部は上内方に立ち上がり端部は丸い。	内・外面とも回転ナデ。	胎土…密(3mm大の砂粒を多量に含む) 色調…灰黃色 焼成…不良
15	高 杯	脚 径 11.4 残存高 8.5	杯部欠損。脚部はゆるく外反しながら立ち上がり、端部付近で大きくハの字状に開く。端部は平ら。杯部境内上外方へ延びる。	脚部内面上方から少しづつはしづり目、他は回転ナデ。杯部底部内面は静止ナデ。	胎土…密(4mm大の砂粒を少量化) 色調…淡灰銀色 焼成…良好
16	門面鏡	周縁径 24.8 脚部径 25.8 器 高 8.0	脚部は中央へ向ってやや下がる。U字型の脚部をもつ。脚縁はほぼ直線に立ち上がり端部は丸い。脚部は2条の凸線を有した後下外方に下り、端部は内向する平面をもつ。脚部には長方形のスカシ窓を有する。	内・外面とも回転ナデ。底部は後静止ナデ。	胎土…密(5mm大の砂粒を含む) 色調…淡灰黃色 焼成…良好

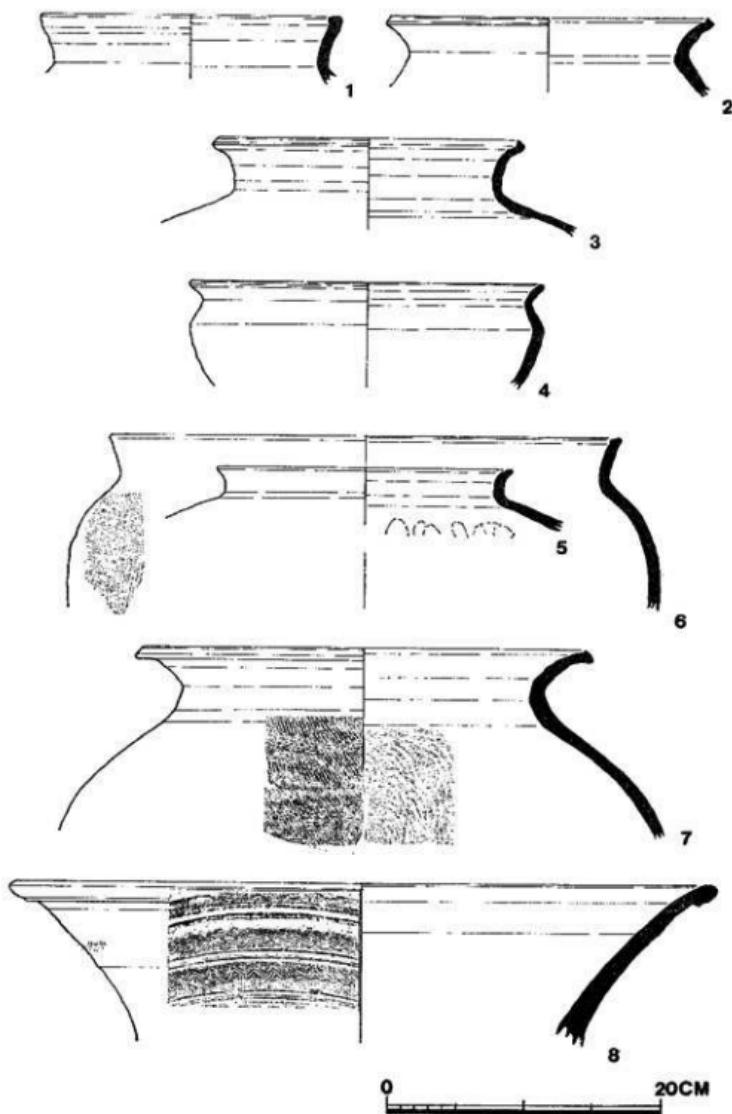
(祭 本)



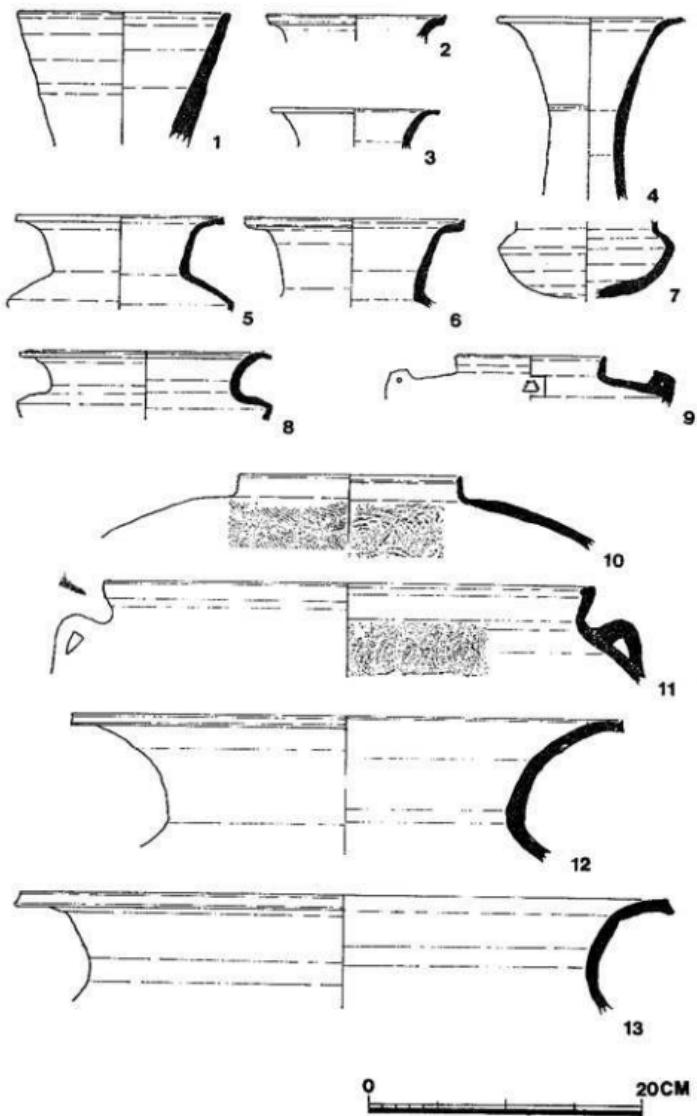
第19図 灰原内土器実測図



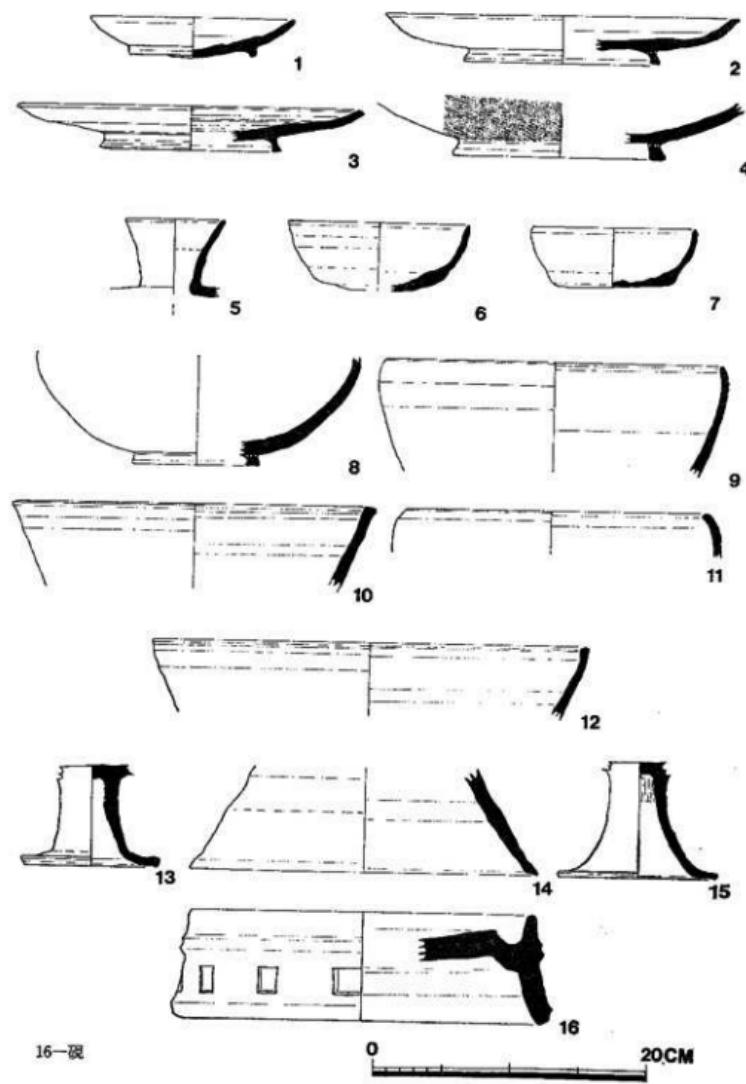
第20図 灰原内土器実測図



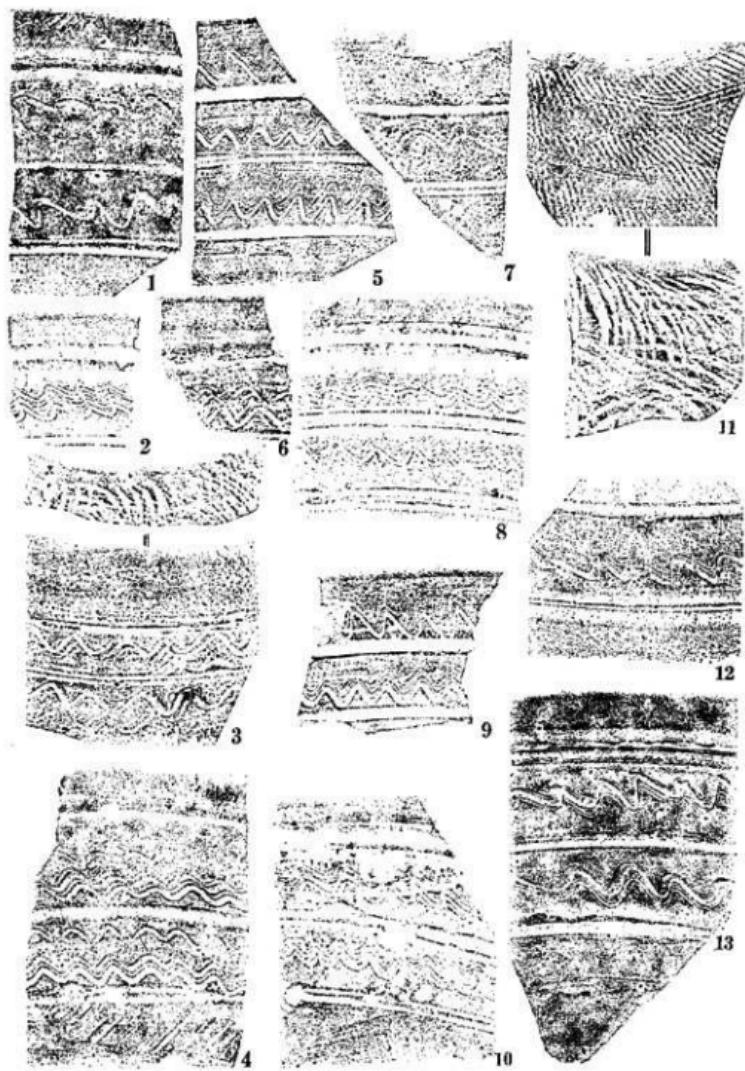
第21圖 灰原內土器実測図



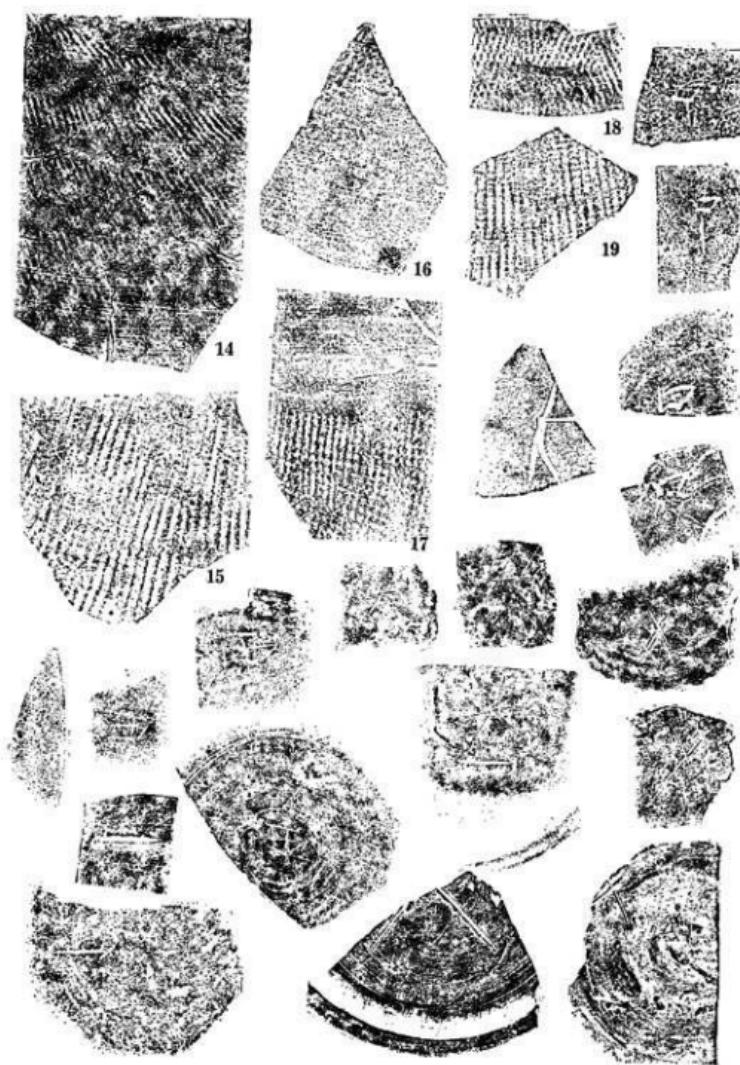
第22圖 灰原內土器実測図



第23图 灰层内土器残片图



第24図 土器 口縁部文様拓影



第25図 タタキ文と主要ヘラ記号拓影

8. ま　と　め

今日大阪府下で知られる最大の須恵器の古窯跡群は和泉阪南丘陵に分布する陶色の窯跡群と、今一つ北摂の地にあって有名な吹田市千里丘陵を中心に遺存する千里窯跡群が須恵器の生産地として学界に周知された地域である。豊中市内の窯跡群もこの中に入れられるわけである。本市内のものは桜井谷古窯跡群と呼称されている。

その桜井谷にはかって100基余りの窯跡が遺存していたそうであるが周辺の開発造成によって破壊され残存数も10基たらずという。だが幸いな事にそれらについては現在までに何等かのかたちで調査され、報告書も出されている。ごく最近ではあるが和泉陶邑窯跡群の編年表を基本におきながら本市内独自で桜井谷窯跡群出土の須恵器の編年を木下亘氏を中心に試みられまとめられた。このことは今後の調査研究にとって有難いことである。^⑥

本報告書のまとめとしては本市内で調査された分の報告書、それに先述の編年表を念頭において記述することにした。

緑丘での発掘調査で見い出された窯跡は残存状態も悪く、検出できた窯の奥壁下床部も小範囲といったもので、それからは窯体の規模、構築法など到底明らかにする余地もなかったが床面に残っていた土器片と灰原に包含されていた遺物等から此処で營まれた窯の期間を考察し、総括のまとめとしてみた。

先ず出土した須恵器全体を遙観して気付くことは、提瓶、平瓶、横瓶、疊の出土がほとんどみられなかつたことである。この事実を陶邑窯の編年でみると提瓶の出土数が急に減少し、横瓶の数も少なくなってくるⅠ型式2段階から、疊の出土例のなくなるのをⅡ型式3段階としているから本窯で焼成された土器は凡そ、それ以後のものとなろう。これを桜井谷窯跡編年表に比定すれば矢張り疊の消えゆくⅢ型式後半(Ⅲ-2)以後と云うことになる。しかし須恵器の型式編年を考える場合、基準となる蓋杯について言及せねばなるまい。そこで出土した蓋と杯身について観察をしぶり、他の窯跡との比較としておきたい。即ちこの窯で古い形式と思われる蓋は天井外面中央部に擬宝珠形のつまみをもち口縁端部の内に短かいかえりをもつてゐる破片2点である。その一つは天井部の擬宝珠形を欠いてゐるが、天井部は全体的に丸味をもち、口縁端部の内面で少し下方へ向けたかえりをもつてゐる。

他的一点は先のよりやや小型で半径5.1cm、天井部中央には形のよい擬宝珠形のつまみをもつた器高3.1cmのもので天井から端部にかけての肩には、はっきりとした稜線がつけられている。そして口縁端部には下方に向けたかえりをもつてゐる。ただしこのかえりは端部より下に出るものではない。この型式は桜井谷窯跡編年表にはなく、あえて挿入するとすればⅣ型式の1と2の中間に位置すべきか、Ⅴ型式の2の初めとみるべきであろう。

次に杯身であるが、陶邑編年で云うⅢ型式の3段階で多くなった高台をもつもの、高台の伴わないものの二者の出現する時期に適合さすべきではなかろうか。即ち高台をもつ杯身も、もたない杯身もその口縁部は外傾し、端部は丸くなっている。しかし高台をもつ杯身は、もたない

のにくらべて口径が大きく、杯の底部は深くなっている。

これ等の他、各器種それぞれの詳細な特徴説明は遺物観察の項に委ねておく。

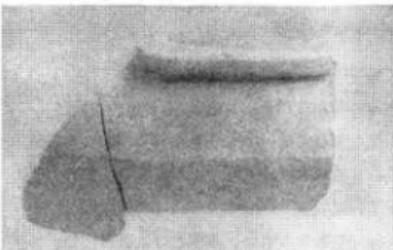
今まで記述したことは本窯での操業開始時期を決定するための試案的なもので、それからすると、窯の開始は凡そ陶邑Ⅲ型式2段階と考えるのが無難なところであろう。そしてこの窯の最盛期は高台をもつ杯身の盛行するⅣ型式1段階、加えて天井部に擬宝珠形のつまみをもち、端部を下方に長く垂れる短頸壺の蓋を作るようになるⅣ型式2段階が中心時期となる。桜井谷窯跡群年表でならⅢ型式後半以降でⅣ型式の補充とその後への継続を可能ならしめる新資料としてその歴史的価値は高い。

なお、本市内でこの時期にあてはまるものではなく、多少とも同時期間に並行する窯と云えば底面にヘラ描きした「利」のくずし字とみられる文字を書いた杯身と、四脚をもった円面鏡、蓋の天井部に擬宝珠形のつまみをもち、端部内側で僅かなかえりを残すものを出土させた桜井谷窯跡群中の2-19窯と2-19-2窯が指摘されよう。⁽⁶⁾

隣接する吹田市千里窯跡群地区でもST-9窯出土の蓋が先述のものに該当する。更にこの時期と近接する窯として高槻市の成合琴堂窯跡で奈良時代の須恵器も生産していたと報告されている。奈良期といえば当窯で出土した円面鏡も土器に記されていた文字のうえから当時のものとみるのは早計であろうか。⁽⁷⁾

遺物の中には大型であるにもかかわらず器種不明のものも存在している。同様なことで特異な器形の須恵器は桜井谷2-24窯からも出土している。しかし今ただちにこれらの解明には至らないが近い将来、補筆する機会をもち、一つの研究テーマとして提起してみたいと思っている。

(玄野)



第26図 器種不明土器

〔註〕

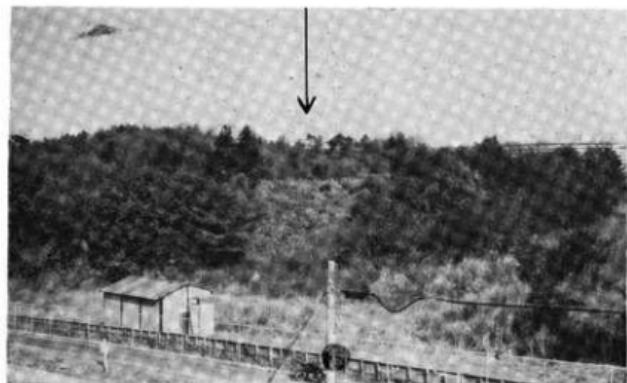
- ① 『桜井谷窯跡群 2-19窯跡・2-24窯跡』
桜井谷窯跡群発掘調査団 1977.
- ② 中村浩『陶邑Ⅱ』大阪府文化財調査報告書第30編
大阪府教育委員会 1918.
- ③ 前掲書 誌1
- ④ 前掲書註 2
- ⑤ 前掲書註 2
- ⑥ 桜井谷窯跡群 2-17窯跡（摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年）
少路窯跡遺跡調査団 1982.
- ⑦ 前掲書註 2
- ⑧ 前掲書註 1
- ⑨ 『千里古窯跡群』 鋸島敏也・藤原 学 1974.
- ⑩ 原口正三『高槻市史考古編』 高槻市史第6巻 1973.



図

版

図版第1 発掘調査区域全景と試掘トレンチ



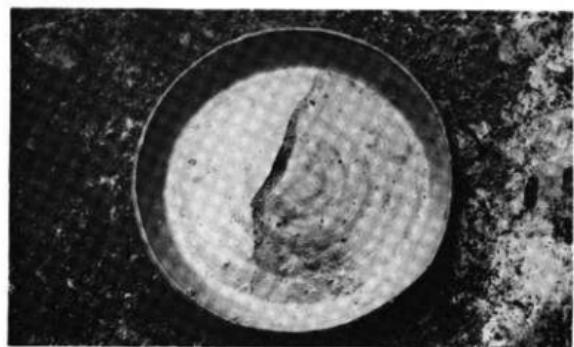
調査現場を向いの丘より望む



第4トレンチ小溝と灰片を含む産み



第14トレンチ



須恵器出土状況



同上

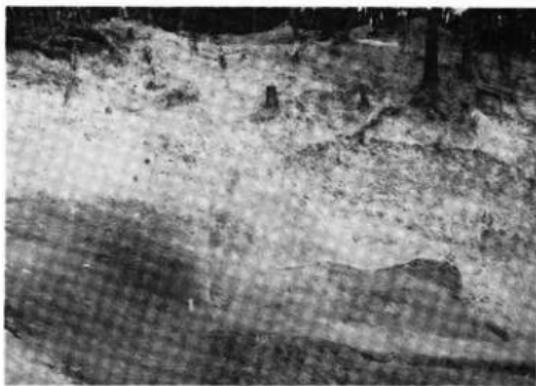


同上

図版第3

奥壁下床残部

奥壁下床残部と灰原全景



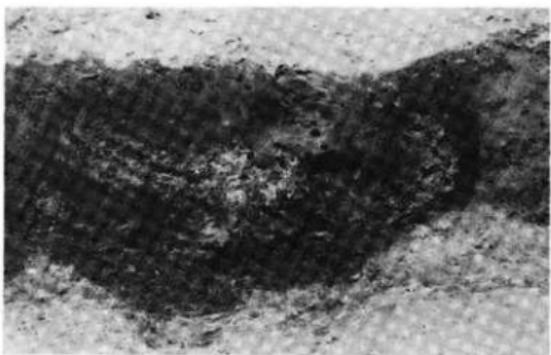
奥壁下床面・たわわり



奥壁下床面・たわわり 下方より



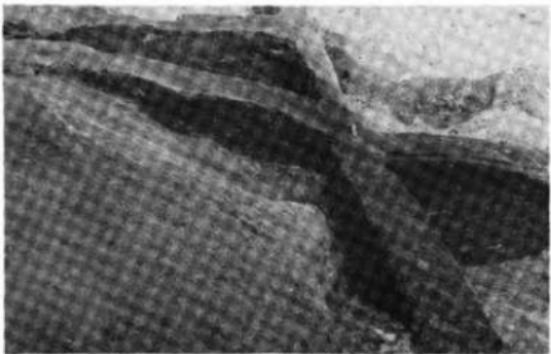
図版第4 煙体一部と灰原断面



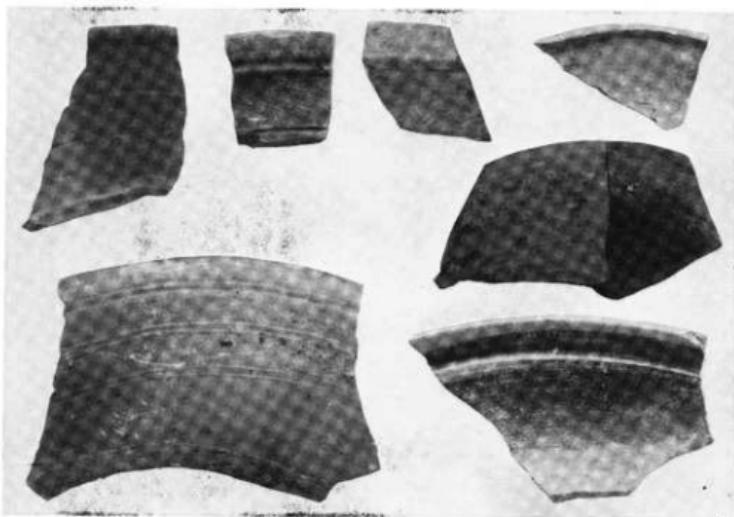
別の煙体 残部か



灰原断面中央部



灰原断面西端部

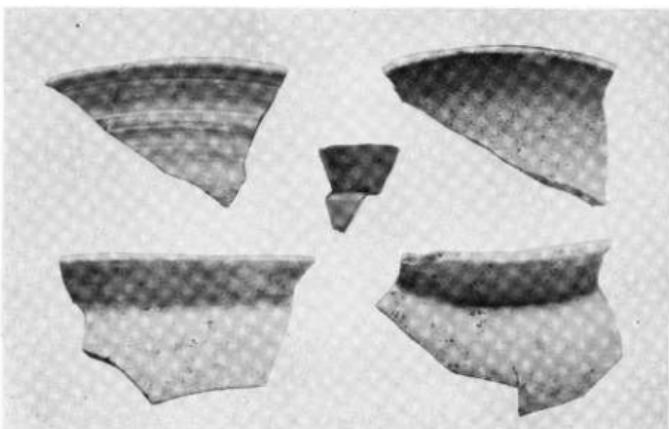


灰原內出土遺物（土器口緣部）

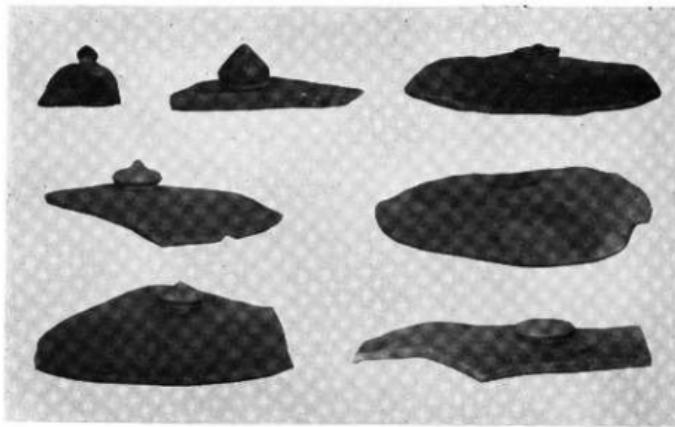


同 上

圖版第6
灰原内出土遺物

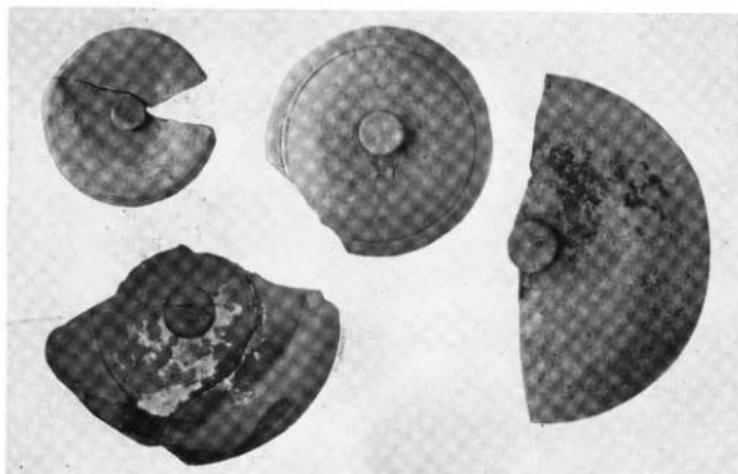


灰原内出土遺物（土器口縁部）

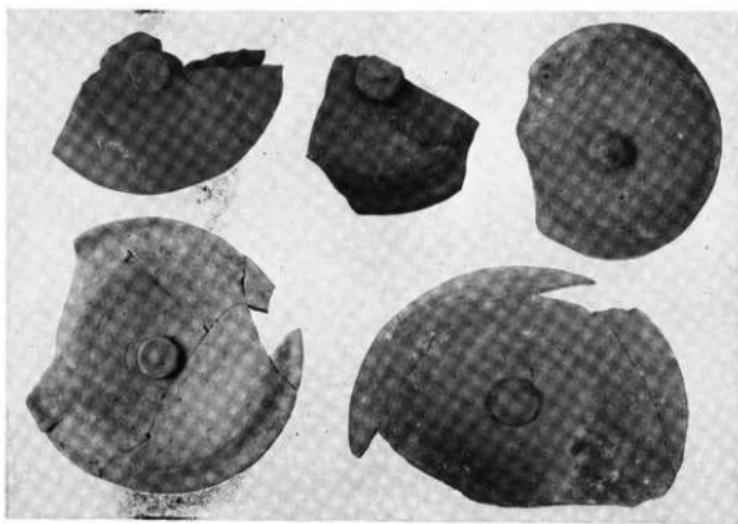


灰原内出土遺物（底盤）

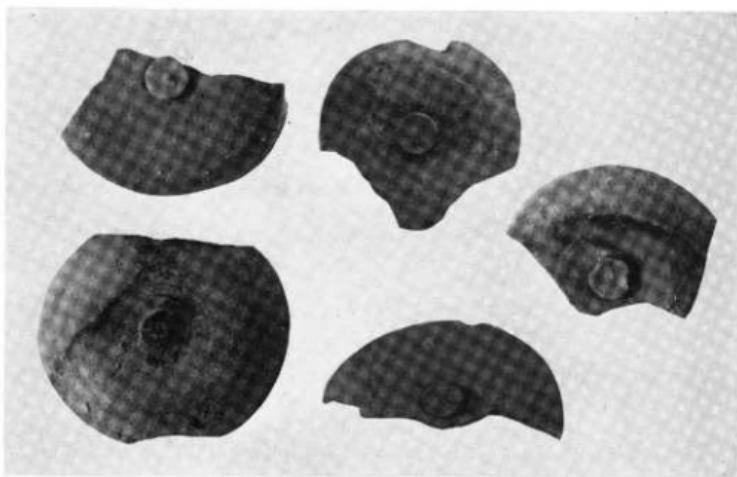
圖版第7 灰原内出土遺物



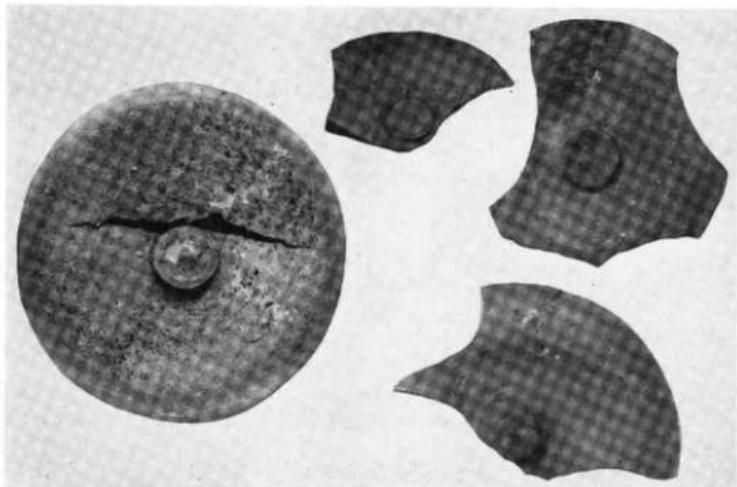
灰原内出土遺物（杯蓋）



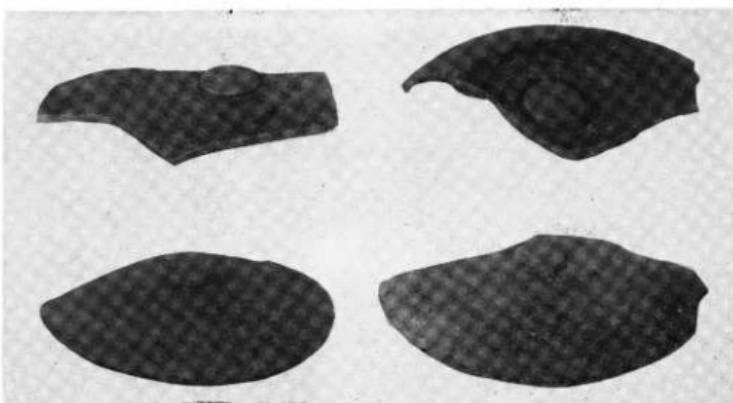
同上



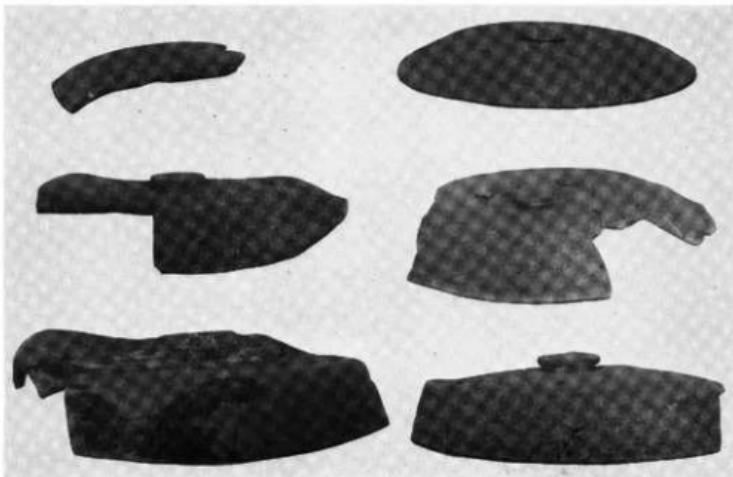
灰原內出土遺物（杯蓋）



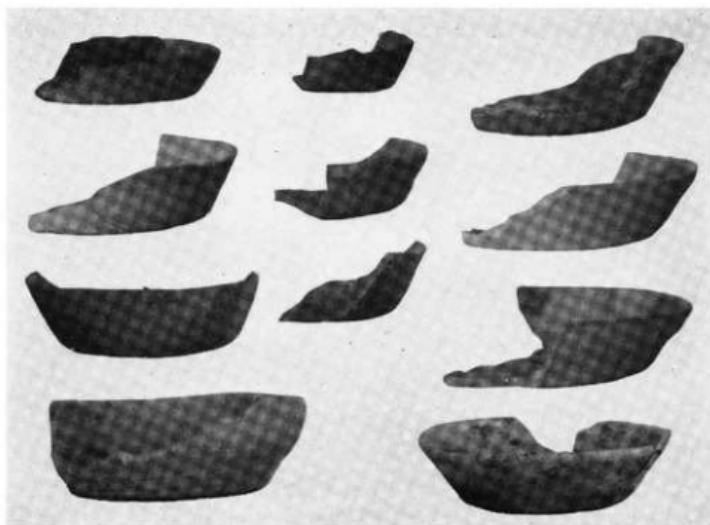
同上



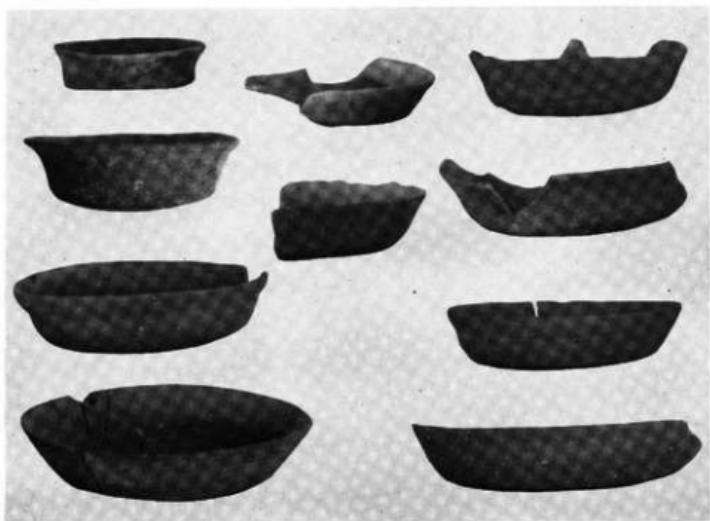
灰原內出土遺物（杯蓋）



同上

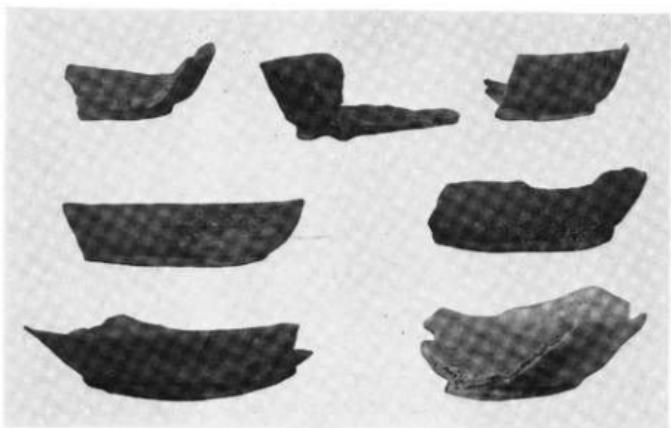


灰原内出土遺物（杯身）

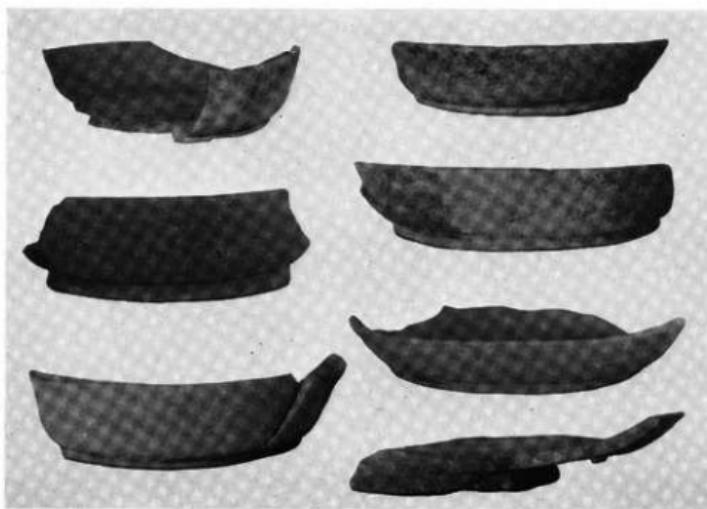


同上

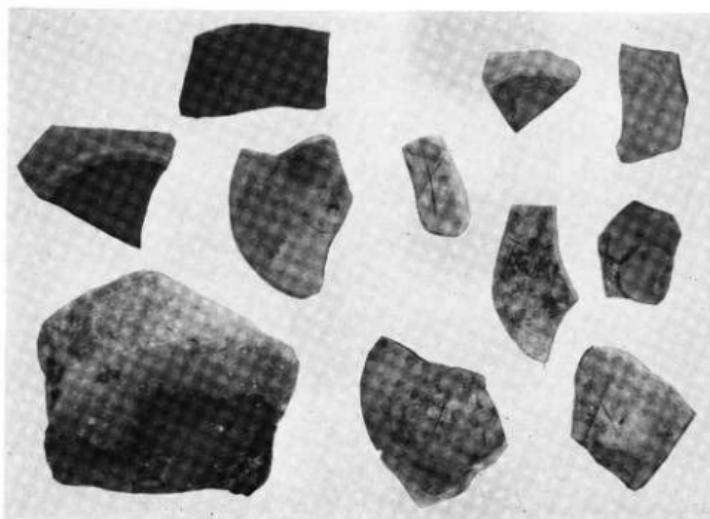
圖版第11 灰原内出土遺物



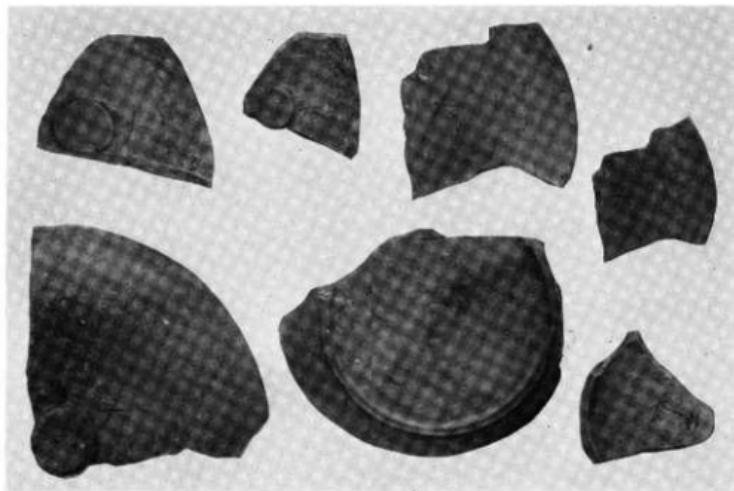
灰原内出土遺物（杯身）



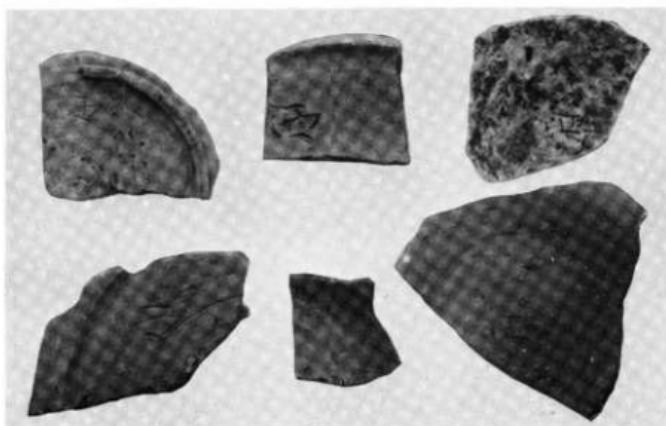
灰原内出土遺物（右下台付皿）



ヘラ記号（×印）



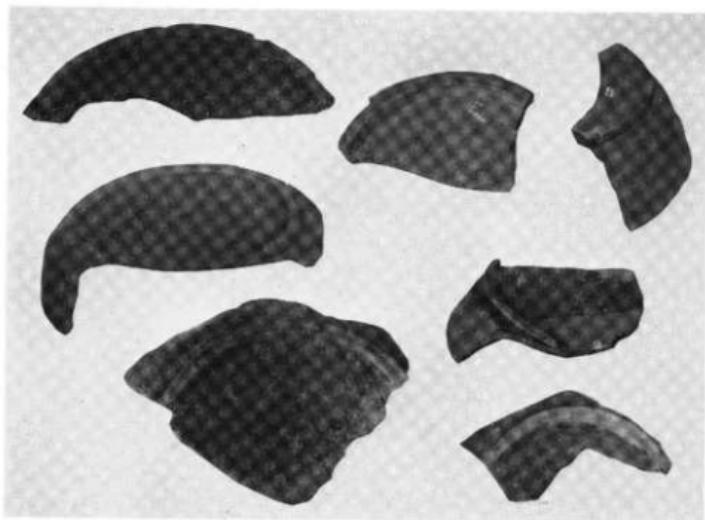
ヘラ記号（大印）



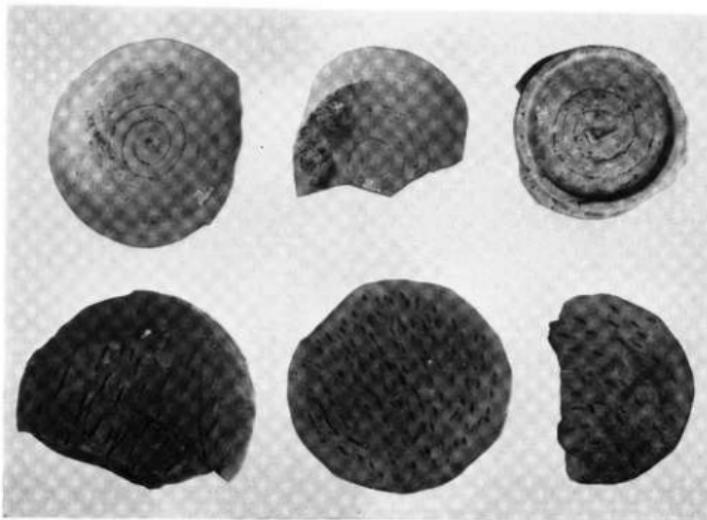
ヘラ記号（西印）



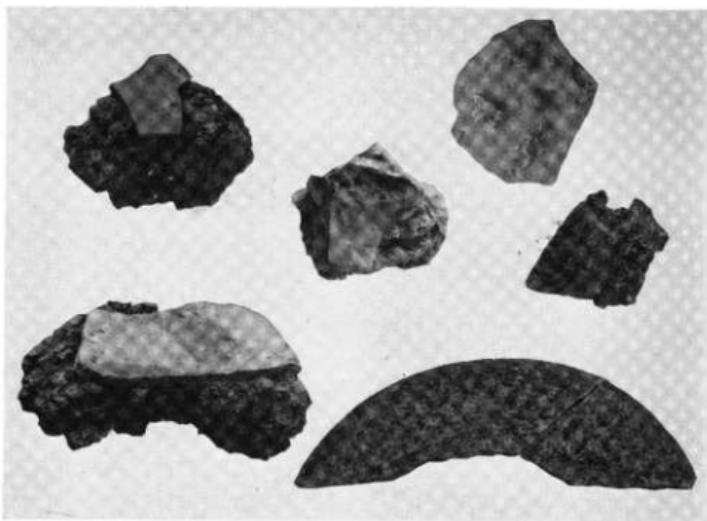
把手と脚部



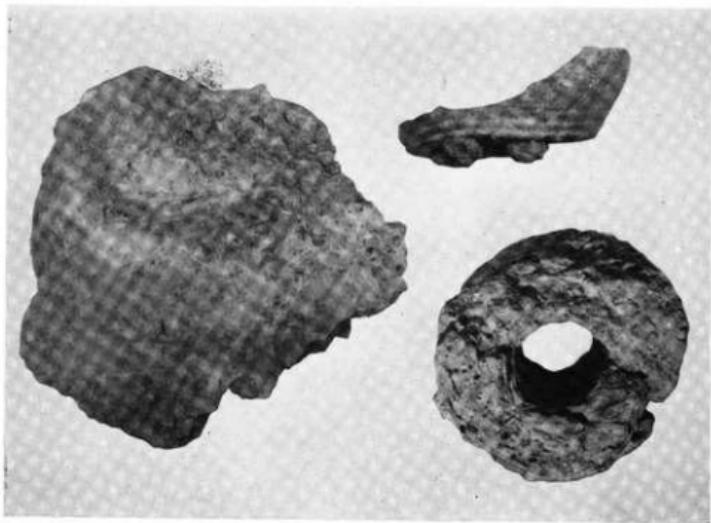
底部 高台



土器底部



窯体物付着の土器



窯壁一部・窯体物付着の土器底部（右上）・縁口

熊本市文化財調査報告書 第31集

綠丘窯跡

発行日 1984年3月

発行 緑丘固体遺跡調査団

編集 無

印刷 国西成光株式会社

大分市鶴島区大原2丁目3番4号